ひら いで めん うち だい い せき

平出免の内台遺跡

（第Ⅱ次調査）

平成３０年６月

宇都宮市教育委員会

序

古代、うつのみやは河内郡に属し、池辺郷、大続郷、刑部郷、衣川駅家の諸郷があったと言われています。このうちの衣川駅家は、古代の官道である東山道沿いに置かれた公的な施設の一つで、ここを通って、多くの中央官人や軍隊が都と陸奥国を行き来していました。

昭和63年度に本県で初めて東山道と推定される遺跡が発見されて以来、現在までに多くの関連遺跡が確認されており、その点と点を結ぶことにより、おおよそ県内のどの辺りを東山道が通っていたかが分かってまいりました。

本市内においても東山道と推定される遺跡が確認されております。中でも、平成４～５年度に行われた南方約120ｍの上野遺跡の調査や、平成22年度に行われた調査では、東山道関連と考えられる溝が確認されており、今回調査で確認された溝はその延長線上にあることから、一連のものと考えられます。

今回、集合住宅の建設及び宅地造成工事に伴い影響を受けることになった本遺跡の取り扱いにつきましては、事業者をはじめ、関係機関と協議のうえ、記録保存のための発掘調査を実施することになりました。その結果、前述の東山道関連と推定される溝のほかに、古代の住居跡が確認され、東山道のルートの解明とともに、貴重な資料が得られたものと考えております。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方がさまざまな方面で広く活用いただきますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました、地権者並びに関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成30年６月

宇都宮市教育委員会

教育長　水　越　　久　夫

例　　言

1．本書は、栃木県宇都宮市平出町字上野に所在する「平出免の内台遺跡　第Ⅱ次調査」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、石原秀子氏が施工する集合住宅建設に伴うもので、宇都宮市教育委員会の指導の下、事業者より委託を受けた株式会社 日本窯業史研究所が調査主体としてこれにあたった。

3．野外調査は、平成29年11月4日より同年11月26日まで実施した。整理・報告書作成作業は調査終了直後に着手し、平成30年6月まで行った。

4．調査組織

調査指導・宇都宮市教育委員会
　文化課長　松本　邦夫
　文化課文化財保護グループ係長　君島　直人
　文化課文化財保護グループ指導主事　竹下　亘

調査主体者・株式会社 日本窯業史研究所
　代表取締役　菅間　裕二
　調査担当者　水野　順敏
　（日本考古学協会員）

5．本書の執筆は第1章第1節を竹下、他は水野が担当し、遺物･図面整理、編集は菅間智子の協力を得た。

6．調査記録及び出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。

7．野外調査及び整理・報告書作成作業において下記の関係機関・各位よりご助力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する次第である。

石原秀子、栃木県教育委員会事務局文化財課、積水ハウス（株）宇都宮支店、（有）鈴木宰倫総合コンサルタント事務所、（株）星野組、今平利幸、木下実、中山晋、パーラ平成平出店

（敬称略、順不同）

8．調査参加者

青木勝一、石川義夫、入江晴江、入江通子、小川征男、塩沢寿男、島田敦子、島田麻季、
髙山文雄、西村順雄、百瀬洋子、渡辺重夫　（敬称略、順不同）

凡　　例

1．本遺跡名の略号は、「ＨＭＮ」で第Ⅱ次の「Ⅱ」を付して遺物注記等に使用した。また、遺構の略号は溝跡＝SD、竪穴建物跡＝SI、掘立柱建物跡＝SB、小穴＝Ｐ、性格不明遺構＝SX である。

2．第３図は国土地理院発行の２万５千分の１地形図『宇都宮東部』、第16図は宇都宮市発行の２千５百分の１都市計画図「92－１」を部分複製し加筆した。第４図は『上野遺跡』第19図に加筆した

3．遺構図面の縮尺は、60分の１を基本とし、遺構配置図120分の１、カマド30分の１である。遺物は３分の１に統一した。遺物の番号は挿図､図版とも統一した。遺構図のＫは攪乱、▦はカマド構築材、▒カマド、▒黒色処理 、土器断面の白抜は土師器、スミベタは須恵器、アミ掛けは灰釉陶器を示す。

4．遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図等に示す数値は、海抜標高である。

目　　次

序　例言　凡例　目次
第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …………………… 7
　第１節　調査に至る経緯 …………………… 7
　第２節　調査の方法と調査の経過 …………………… 8
　第３節　基本土層 …………………… 8
第２章　遺跡の位置と環境 …………………… 9
　第１節　地理的環境 …………………… 9
　第２節　歴史的環境 …………………… 9
第３章　確認された遺構と遺物 …………………… 13
　第１節　溝跡 …………………… 13
　第２節　竪穴建物跡 …………………… 19
　第３節　掘立柱建物跡・小穴類 …………………… 20
　第４節　土坑類 …………………… 20
第４章　総括 …………………… 27
　第１節　土地利用の変遷 …………………… 27
　第２節　遺構・遺物について …………………… 27
参考・引用文献
写真図版
報告書抄録・奥付

挿図目次

第１図　確認調査図（１：300）
第２図　基本土層図
第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡
第４図　東山道ルート推定図
（拠：『上野遺跡』第 19 図）
第５図　調査区コンター図（１：200）
第６図　遺構配置図（１：120）
第７図　SD－１土層（A･A'、B･B'、C･C'、D･D'）
第８図　溝跡出土遺物
第９図　SD－２土層（A･A'、B･B'、C･C'、D･D'）
第10図　SD－３土層（A･A'、B･B'、C･C'、D･D'）
第11図　SI－１・掘方、SI－１カマド・掘方
第12図　SI－１出土遺物
第13図　SB－１（SK－３・6A・6B・７）・SB－２（P－２・３）
第14図　小穴出土遺物
第15図　SK－１・２・４・５・８、SX－１
第16図　平出免の内台遺跡と上野遺跡
（拠：『上野遺跡』第１図）

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表
第２表　溝跡出土遺物観察表
第３表　SI－１出土遺物観察表
第４表　小穴出土遺物観察表

図版目次

図版１　A．調査区全景（北より）　B．調査区全景（南東より）　C．SI－１完掘（南より）　D．SI－１完掘（東より）　E．SI－１東西土層（南より）　F．SI－１掘方西半部（南より）　G．SI－１カマド遺物出土状態（南より）　H．SI－１カマド完掘（南より）
図版２　A．SI－１カマド掘方（南より）　B．SI－１カマド東西土層（南より）　C．SI－１遺物出土状態（北より）　D．SI－１遺物出土状態（南西より）　E．SD－１完掘（南より）　F．SD－１完掘（北より）　G．SD－１・１Tr土層（南より）　H．SD－１・３Tr土層（南より）
図版３　A．SD－２完掘（南より）　B．SD－２・１Tr土層（南より）　C．SD－３完掘（北より）　D．SD－３南北部完掘（北より）　E．SD－３北東角（南西より）　F．SD－３・１Tr土層（東より）　G．SK－１完掘（東より）　H．SK－３完掘（北より）
図版４　A．SK－４完掘（西より）　B．SK－５土層・完掘（東より）　C．SK－6A・B完掘（西より）　D．SK－７完掘（南より）　E．SK－８土層・完掘（東より）　F．SX－１土層・完掘（南より）　G．P－２・３完掘（西より）　H．基本土層（北より）
図版５　出土遺物

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

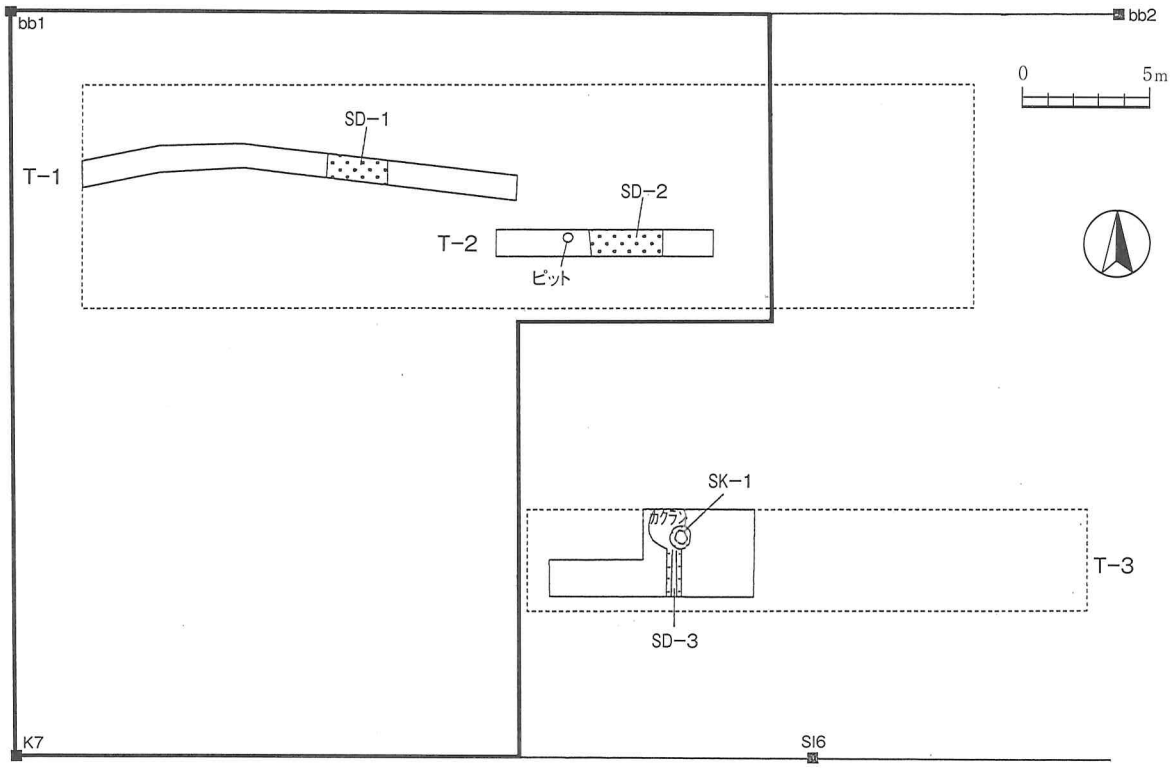
平成29年７月24日付けで、石原秀子氏より、宇都宮市平出町字上野4104番１の推定東山道内での、集合住宅建設に伴い、文化財保護法第93条の申請が提出された。同日付で市教育委員会文化課（以下、市文化課）から県教育委員会文化財課（以下、県文化財課）へ進達し、これに対し県文化財課より確認調査が必要である旨の指示が８月２日付けであったため、事業代理人であった（有）鈴木宰倫総合コンサルタント事務所を通じて、事業者と協議し、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、９月26日～27日まで実施した。調査の方法は、開発区域内で集合住宅建設等により掘削が及ぶ範囲に幅１～1.5ｍの試掘溝を３本設定し（Ｔ－１～Ｔ－３）深さ40～80cmの表土部分を重機により掘り下げ、遺構の確認を行った。その結果、Ｔ－１で東山道の側溝と推定される溝跡が１条、Ｔ－２でも東山道の側溝と推定される溝跡が１条、Ｔ－３から土坑１基、時期不明の溝１条を確認した。確認調査の結果から、当地区の遺跡名を平成21年10月に行った発掘調査と同様に、平出免の内台遺跡とした。

調査結果を踏まえて、石原氏並びに代理人である（有）鈴木宰倫総合コンサルタント事務所と協議を行い、その後の対応を協議した結果、遺構が保護出来ない部分を本調査することとなった。また、敷地全体を大規模に造成する計画が持ち上がったため、協議の結果、造成部分も発掘調査が必要であるとの結論に至り、調査対象面積は集合住宅建設予定地に造成部分を加えた計720㎡となった。

その後、調査の担当者が（株）日本窯業史研究所と決まり、10月４日付で事業者である石原氏と宇都宮市教育委員会教育長水越久夫の間で調査に関する覚書を交わした。

発掘調査は、市文化課の指導の下、（株）日本窯業史研究所が調査主体者として行うこととなった。



第１図　確認調査図（１：300）　　本調査範囲

第２節　調査の方法と調査の経過

調査は、平成29年11月３日に器材の搬入、調査区の位置出し、調査前写真の撮影等を行い、翌11月４日より重機による表土除去作業に着手した。11月６日から作業員が加わり、テントを設営の後、遺構確認作業に入る。確認した遺構のうち、溝跡は主軸に直交するトレンチによって土層観察・記録の後完掘作業に移った。竪穴建物跡は十文字、土坑・小穴等は半裁により土層の観察・記録を行い、完掘して写真撮影・実測等の記録を行った。調査区画は、公共座標（世界測地系）に基づき５ｍ方眼を設定し、Ｘ座標をアルファベット、Ｙ座標をアラビア数字で示した。南西隅を原点とし、その座標値はＸ＝62575.000、Ｙ＝9080.000を示す。写真記録は、35㎜判の白黒・カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。撮影には三脚・大型脚立を使用した。平面実測は、縮尺20分の１で調査区全体を網羅し、光波距離計で計測、人手で方眼紙に作図、遺構配置図はこれを縮小した。土層図は縮尺20分の１、カマドは縮尺10分の１で作成、計測・作図とも人手で行った。

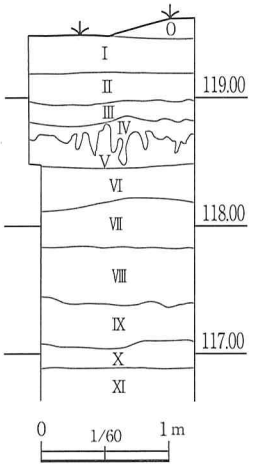
調査は、重機による表土除去作業を11月４日より同月９日まで行った。６日から人力による遺構確認作業と切株の処理に着手した。調査区中央部を南北に延びるSD－１、その東方約10ｍにやはり南北に延びるSD－２を確認した。さらに、SD－１の西脇約2.5ｍを並走するように延びるSD－３を確認したが、これは確認調査の際には確認されていなかった。SD－１・３は第Ｉ次調査区で確認されていたものの延長と判断されるが、SD－２は新規の確認である。また、第Ｉ次調査区よりSD－１の西脇を並走するように延びて来たSD－３は、調査区北端の手前約８ｍの所で直角に折れて西進することが判明した。さらに、SD－１の埋没後に構築されたSI－１が確認された。

11月６・17日に市教委による視察があり、同月24日には調査終了確認の立ち会いを受ける。翌25日は記録の補足、26日は記録の補足と器材の撤収を行い、全ての野外調査を終了した。

整理・報告書作成作業は、調査終了直後より着手し、断続的に作業を行い、平成30年６月に終了した。

第３節　基本土層

調査地点は岡本台地の東縁部に立地し、東側直下を山下川が南流する。台地は基本的には南と東側に向かって傾斜するが、今次調査区では北側に東から谷が嵌入することから北と東に向かって下降している。最も高い、南西隅の土層を図示（第２図、図版4H）した。なお、工事関係の掘削によれば、北東の台地縁辺部ではローム層の上位に七本桜・今市パミスの堆積、ローム層の下には礫層（径10～400㎜）の存在が見られた。



Ｏ．工事に伴う整地土
Ｉ．暗褐色土（10YR3/3）腐植土主体、締まり弱い、表土層
Ⅱ．黒褐色土（10YR3/2）LR（１～５㎜）少量含む、締まり弱い
Ⅲ．黒褐色土（10YR2/2）IP（１～10㎜）少量、LR（１～５㎜）微量含む、締まりあり
Ⅳ．灰黄褐色土（10YR4/2）SP（１～５㎜）微量、IP（１～15㎜）少量含む、締まり強い、ローム漸移層
Ⅴ．明黄褐色土（10YR7/6）SP･IP（２～15㎜）少量含む、締まり強い
Ⅵ．明黄褐色土（10YR6/6）褐色Ｒ（１～３㎜）微量含む、締まり強い
Ⅶ．明黄褐色土（10YR6/6）白色Ｒ（１～２㎜）微量含む、締まり強い
Ⅷ．黄褐色土（10YR5/6）締まりやや弱い
Ⅸ．明黄褐色土（10YR6/6）締まり強い
Ⅹ．灰黄褐色土（10YR6/2）KPを含む、締まり強い
Ⅺ．黄橙色土（10YR8/8）KP純層中にＸ層が入る、締まりあり

略号は以下の通りである
Ｌ：ローム　SP：七本桜軽石　IP：今市軽石　KP：鹿沼軽石
Ｓ：焼土　Ｒ：粒　Ｂ：塊

第２図　基本土層図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

本遺跡は、栃木県宇都宮市平出町字上野地内に所在する。栃木県は関東平野の北端に位置し、東・西・北の三方山地に囲まれ、南方が平野部へと開けている。県都宇都宮市は、県域のほぼ中央に位置し、平出町はその中程に所在する。

遺跡は、市域の東寄りを南流する鬼怒川右岸の標高116～119ｍ程の岡本台地東縁部に立地する。現在の鬼怒川まで約2.5km、台地の直下を山下川が南流し、その東に広がる沖積地との比高は６～９ｍ程である。遺跡の立地する岡本台地は、市内岡本付近より南方の上三川町へと続く台地である。遺跡の西側一帯は昭和36～42年にかけて行われた、平出工業団地の造成工事によって旧地形が失われているものの、所々に浸食谷をもちながら東西幅２～３km程の平坦面が南に延びる。

交通的にはJR東北本線（宇都宮線）の宇都宮駅の東方約2.3kmに位置し、遺跡の東方約0.7kmを新４号国道が南北に延び、北方約2.8kmで国道４号と交差する。また、南方約8.5kmには北関東自動車道が東西に延び、前記の新４号国道と接してインターチェンジが設けられている。

第２節　歴史的環境

本遺跡周辺の周知の遺跡は第３図、第１表に示した如く、分布が非常に疎である。しかしこれは、本来の遺跡の分布状態を示すものでは無いと考えられる。本遺跡の西側の一帯は前述の通り工業団地の造成工事によって削平されており、これより西側の地区は旧い段階に市街化が進んだ為と推察される。事実、工業団地の造成に際し土器等の出土があったと伝えられる。

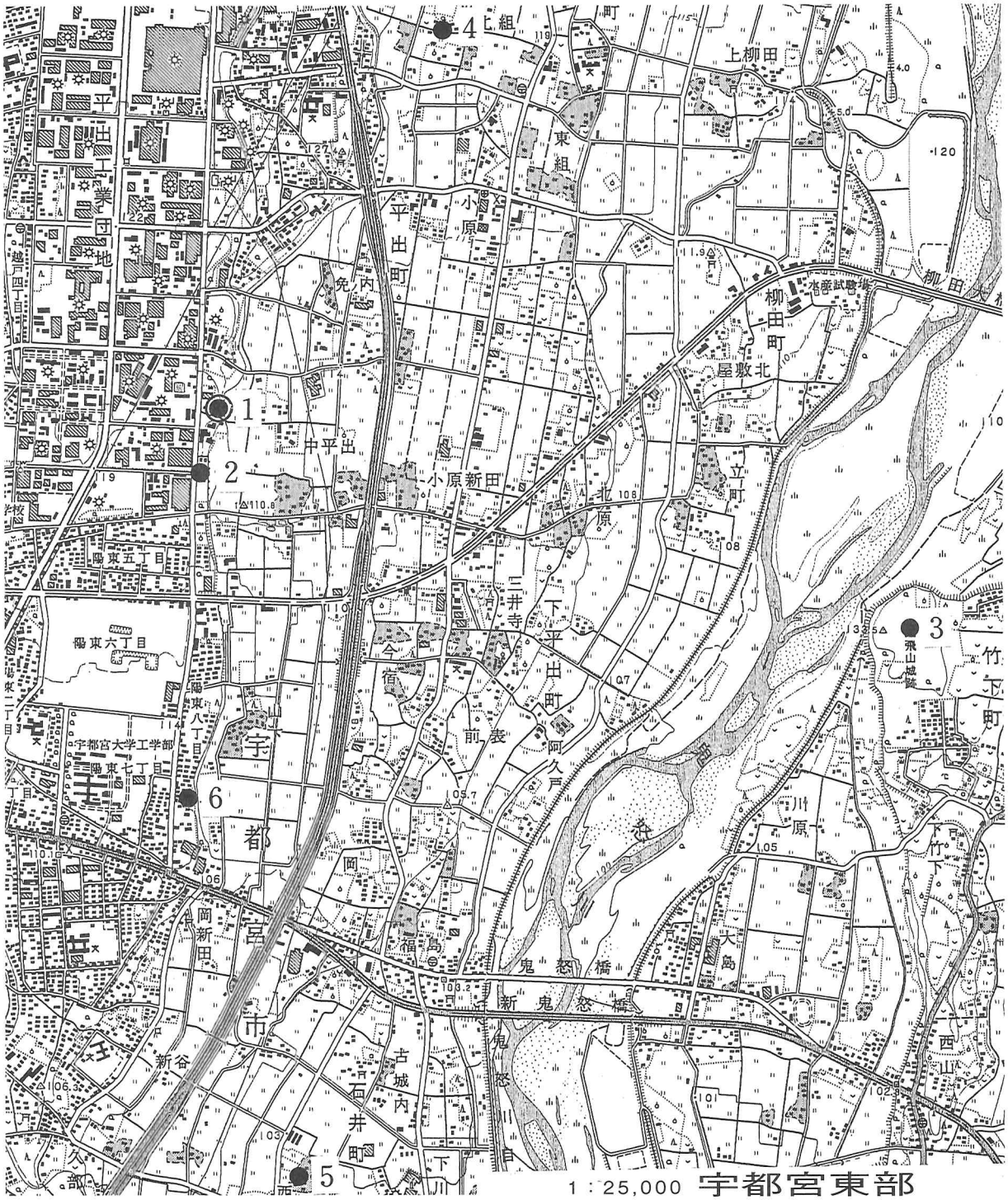
近隣の遺跡を概観すると以下の通りである。

旧石器時代　近隣における該期の資料の存在は管見には触れなかった。

縄文時代　本遺跡の第Ⅰ次調査区では、早期頃と中・後期の土坑、中期後葉の竪穴建物跡１軒、南方約90ｍの上野遺跡第Ⅱ次調査区では、小型の竪穴建物跡２軒と土坑等が確認され、前期～晩期にわたる土器片などが出土している。分布密度は薄いものの、該期の土地利用の一端が知られる。

弥生時代・古墳時代　近隣においてはこれらの時期の資料の存在も管見に触れなかった。

奈良・平安時代　律令制下における当地は、下野国河内郡に属していた。下野国は９郡（62郷）を管する東山道の上国である。下野国府は都賀郡に置かれ、当郡の郡家は南方の上三川と宇都宮市に跨がって所在する、国指定史跡上神主・茂原官衙遺跡及び上三川町の多功遺跡に比定される。なお、延喜式によれば、下野国内には５郡に７箇所の駅家が所在し、河内郡内では「田部駅家」と「衣川駅家」の２箇所が設けられていた（第４図参照）。それぞれの比定地は諸説あるが、多功遺跡（ホ）や上神主・茂原官衙遺跡（へ）、多功南原遺跡などが想定されている。また、衣川駅家は、上野遺跡（第４図９）もしくはその東方直下の木の川遺跡付近を想定する向きもある。上野遺跡のⅠ・Ⅱ次調査で、道路側溝と見られる南北に延びる溝跡３条の他、円形有段土坑（所謂氷室）１基、時期不明（古代と推定）１間×１間の掘立柱建物跡２棟などが確認された。また、本遺跡の第Ⅰ次調査区では、上野遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区の東側の溝跡（SD－１）の延長と判断される溝跡（SD－１）とこの西脇を並走するように延びるやや細い溝跡（SD－２）や平安時代の竪穴建物跡１軒などが確認された。なお、鬼怒川を隔てた東方約2.9kmの国指定史跡飛山城跡（リ）では「烽家」の



第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な時代					備　　考
		縄文	弥生	古墳	奈良･平安	中･近世	
1A	免の内台遺跡第Ⅰ次	●			●	●	古代東山道跡、集落跡
B	免の内台遺跡第Ⅱ次				●		古代東山道跡、集落跡
2	上野遺跡	●			●		古代東山道跡、集落跡
3	飛山城跡				●	●	中世城館跡、古代烽家
4	平出城跡					●	中世城館跡
5	石井城跡					●	中世城館跡
6	山下台高塚群					●	近世高塚群

墨書土器が出土した竪穴建物跡が確認されており、「飛山」の地名の由来と合わせ注目された。

なお、栃木県下では、北は那須町から南西の栃木市、南東の真岡市において計27所で道路跡と推定される遺構が確認・調査されている。これらのうち主なものを第４図に示したが、真岡市の鶴田Ａ遺跡を除けばいずれも推定東山道関連の遺跡・遺構と見られ、本遺跡もその一角を占める。遺跡によっては数次の修治が確認され、長期間にわたる使用が判明している所もあるが、その他の地域においては時代によりルートの変更も予想される。

また、本県では未だ駅家跡と断定し得る遺跡が確認されておらず、課題の一つである。

中世　宇都宮城の東方約4.6kmに位置する当地区は、この時代には宇都宮氏の領内にあり、前記の飛山城跡は重臣芳賀氏の拠点であった。また、鬼怒川右岸には北東の平出城跡（第３図４）、南東の石井城跡（第３図５）など宇都宮氏麾下の城館跡がほぼ一定間隔で配置されているようである。

近世　慶長２（1597）年、宇都宮氏が豊臣秀吉によって改易される。当地は明治４（1871）年まで近世を通じて宇都宮藩領であった。この間10度に及ぶ領主の交替が行われたが、最も長く宇都宮藩を治めたのは戸田氏で、途中25年間程の転封があるものの、２次にわたり約130年間統治した。この辺は宇都宮城まで約4.6kmの距離にあり、のどかな田園地帯であったと推察される。当時は河内郡平出村（上・下平出村）に属し、幕末期の村高は3,000石程であった。本遺跡の第Ⅰ次調査では、古代の道路側溝と考えられるSD－１の上に径10ｍ程の塚が築かれていた。庶民の信仰の対象であったと見られ、多数のカワラケや奉賽銭もしくは撒銭と思われる銭貨が出土した。既に移設されていた石塔類から当時流行していた日待ち・月待ちの信仰に関するものと推察された。また、本遺跡の南方約1.5kmの山下台高塚群（第３図６）も同じ台地の東縁部に位置し、至近を古代の推定東山道が通じていたと推定されている。さらに、北北東約６kmの日枝神社南遺跡（第４図７）においても、推定東山道の側溝と見られる２条の並行する溝が確認され、そこでも近世の塚が調査されている。このように当地では古代道路跡と近世高塚との興味深い現象が認められる。

近代　当地は、現在山林となっているが、かつて耕作地であった可能性が高い。なお、第Ⅰ次調査、今次調査においても、調査区内より焼夷弾の一部が複数出土している。昭和20年７月の所謂「宇都宮大空襲」に際して投下されたものと推定される。

参考・引用文献

1．石川　均　1990『日枝神社南遺跡・南古墳発掘調査報告書』河内町教育委員会

2．宇都宮市教育委員会　1997『宇都宮市埋蔵文化財地図』宇都宮市教育委員会

3．宇都宮市教育委員会　2001『うつのみやの空襲』宇都宮市教育委員会

4．木本雅康　1996「四　東山道－山坂を越えて－」『古代を考える古代道路』吉川弘文館

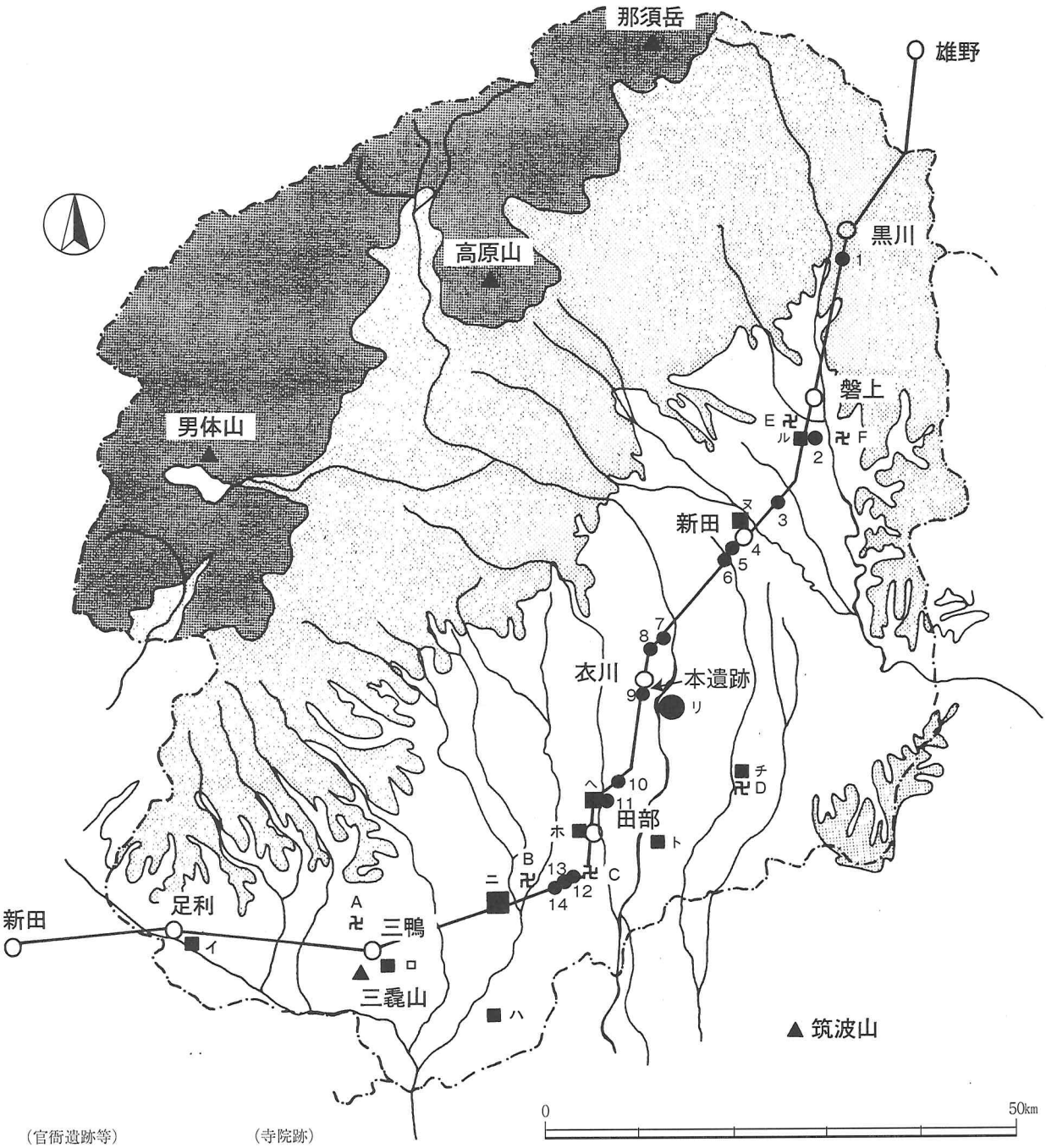
5．今平利幸　1998『上野遺跡』宇都宮市教育委員会

6．今平利幸　1999『飛山城Ⅲ』宇都宮市教育委員会

7．中山　晋　1989「付録　鴻野山地区推定東山道確認調査概要」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和63年度）』栃木県教育委員会

8．中山　晋　2016「古代道路東山道」『とちぎを掘る　栃木の考古学の到達点』随想社

9．シンポジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会・平川　南・鈴木靖民編　1997『烽［とぶひ］の道』青木書店



（官衙遺跡等）
イ　国府野遺跡
ロ　畳岡遺跡
ハ　千駄塚浅間遺跡
ニ　下野国府跡
ホ　多功遺跡
ヘ　上神主・茂原官衙遺跡
ト　中村遺跡
チ　堂法田遺跡
リ　飛山烽跡
ヌ　長者ヶ平官衙遺跡
ル　那須官衙遺跡

（寺院跡）
A　大慈寺跡
B　下野国分二寺跡
C　下野薬師寺跡
D　大内廃寺跡
E　浄法寺廃寺跡
F　尾の草廃寺跡

推定東山道確認遺跡（抄）

No.	遺　跡　名	所　在　地
1	ハッケントヤ遺跡	那須町
2	那須官衙遺跡	那珂川町
3	新道平遺跡	那須烏山市
4	長者ヶ平官衙遺跡	那須烏山市
5	廐久保遺跡	那須烏山市
6	南原遺跡	さくら市
7	日枝神社南遺跡	宇都宮市
8	釜根遺跡	宇都宮市
9	上野遺跡	宇都宮市
10	杉村遺跡	宇都宮市
11	上神主・茂原官衙遺跡	宇都宮市上三川町
12	三の谷遺跡	下野市
13	諏訪山地遺跡	下野市
14	北台遺跡	下野市

第４図　東山道ルート推定図（拠：『上野遺跡』第 19 図）

第３章　確認された遺構と遺物

今次調査で確認された遺構は、古代の溝跡３条、竪穴建物跡１軒、掘立柱建物跡２棟、小穴３基（建物分除く）、土坑５基である。遺物は、奈良～平安時代の須恵器と土師器が出土し、墨書（墨痕）の見られるものが計５片認められた。

第１節　溝跡

溝跡は３条確認し、SD－１・２は南北に延びて南・北両端は地区外に延びる。SD－３は南側から北進し、西に折れて地区外に西進する。

SD－１（第５～８図、図版２・５、第２表）

遺構　調査区の中央を南北に延び、長さ約 28 mを確認した。上野遺跡第Ⅰ次調査区より延びて今次調査区を縦断するもので、推定を含めた総長は約 435 mに及ぶ。断面観察より大きく２期以上の掘り直しが認められるとともに、９世紀後半代の竪穴建物跡に切られていた。

溝の上幅は、2.5 ～ 2.9 m、底幅 1.3 ～ 1.5 m、深さ１～ 1.3 mで、１・２期の断面は逆台形、３期の断面は皿状となる。調査区が傾斜地にあり、底面の南・北の比高は 1.25cm程である。

埋積土は６層に分けられ、第６層は１期の底面を嵩上げして底面幅を広げた際の整地層で締まりが強い。また、３期に伴うと見られる第１・２層は、他の地区同様に締まりが強い。なお、今次調査においても、本跡の周辺に路面と見られる硬化面は確認されなかった。

遺物　埋積土の第１層中より、須恵器６片、土師器２片、灰釉陶器１片の９片が出土した。このうち、須恵器坏（１）・壺（３）、土師器甕（２）、灰釉陶器壺（４）を図示した。

SD－２（第５・６・８・９図、図版３・５、第２表）

遺構　調査区の北東部に所在、南北約 12 mを確認した。北と南は地区外に延びるが、南は約 7.5 m離れた、試掘調査の第３トレンチで確認されておらず、この間で止ると考えられる。中央やや北寄りでSK－１と重複し、これに切られていた。土層観察及び断面形状から２回以上の掘り直しが推定される。また、比較的急な斜面地に設けられたことによるものか、他と掘削の状況が異なる。当初は、平面が幅１m、長さ５～６mの細長い土坑状で、底面がほぼ水平な掘り込みを連続して掘り込んでいた。その後、設けられた２期の溝は、深さ 0.9 ～ 1.2 mと深く壁面が急角度なものになる。３期は幅が 1.5 ～ 2.8 mと広くなり、断面が皿状の浅いものとなる。２期の底面は地形に沿って下降し、南と北の比高は約１mである。

埋積土は前記の状況から観察位置により５～ 12 層とまちまちであるが、３期に判断される上層は締まりが強い。

遺物　埋積土上層より土師器２片が出土し、坏１片（１）を図示した。

SD－３（第５・６・８・10 図、図版３・５、第２表）

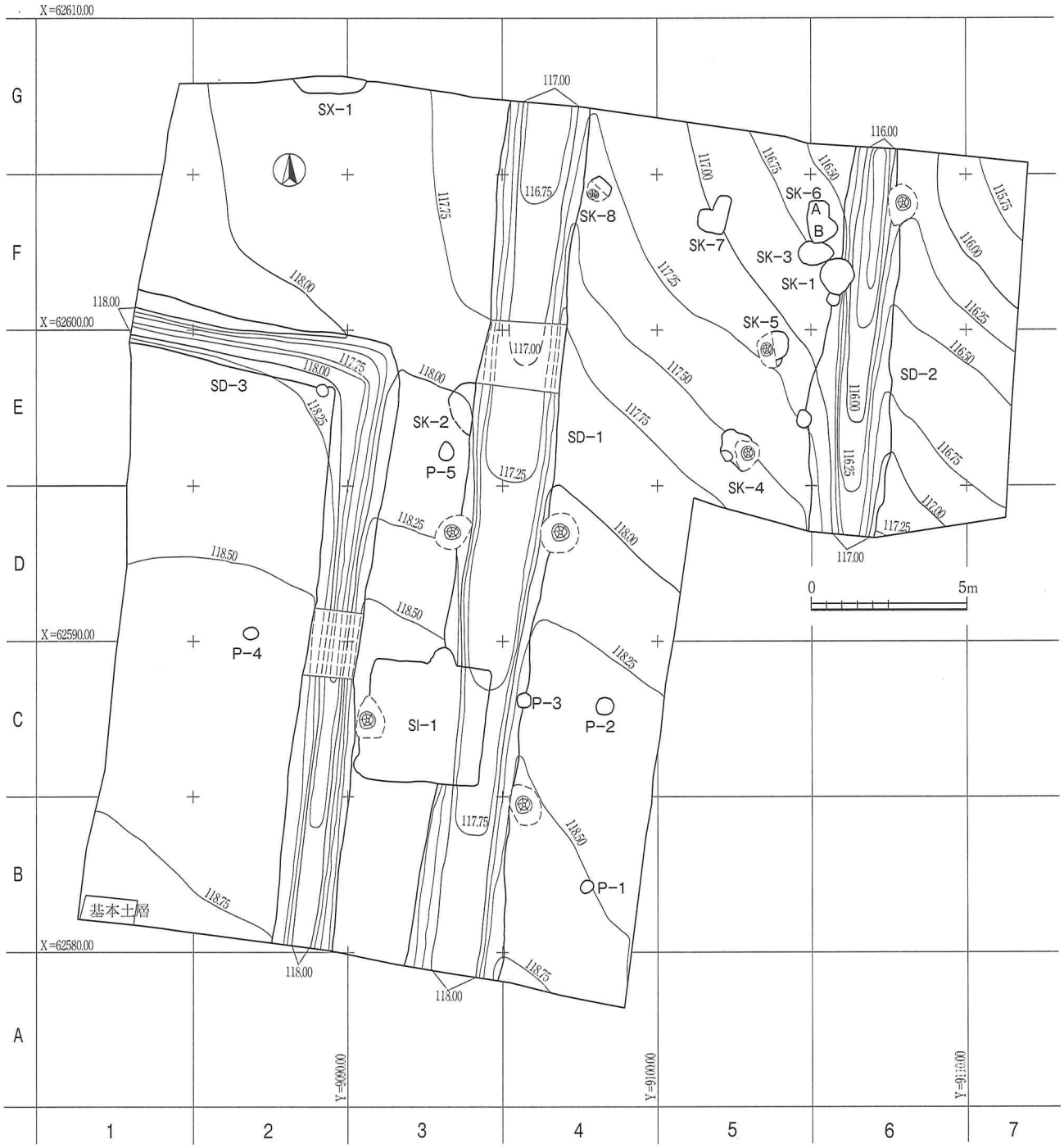
遺構　SD－１の西約 2.5 mを並走するような形で北に約 20 m延びた後、調査区北端の手前約８mでほぼ直角に折れて西進する。南・西端は調査区外に延びる。断面形状やSD－１との位置関係から第Ⅰ次調査区のSD－２の延長と判断される。東辺の確認部総長（推定部分含む）は約 64 mで、北辺は約８mの確認である。

当初は道路側溝と考えられるSD－1に近接して並走するように認められたことから、道路関連の施設を想定したが、北辺が西に折れることから、何らかの区画を目的とした施設と推察される。

上幅1.6～1.9ｍ、深さ0.9～1.1ｍで、狭い底面が認められる部分と、断面がＶ字型で不明瞭な部分とがある。底面の南北の比高は約50cmである。土層観察から２回以上の掘り直しが推定され、１・２期はＶ字型、３期は幅広で浅くなり、皿状の断面となる。

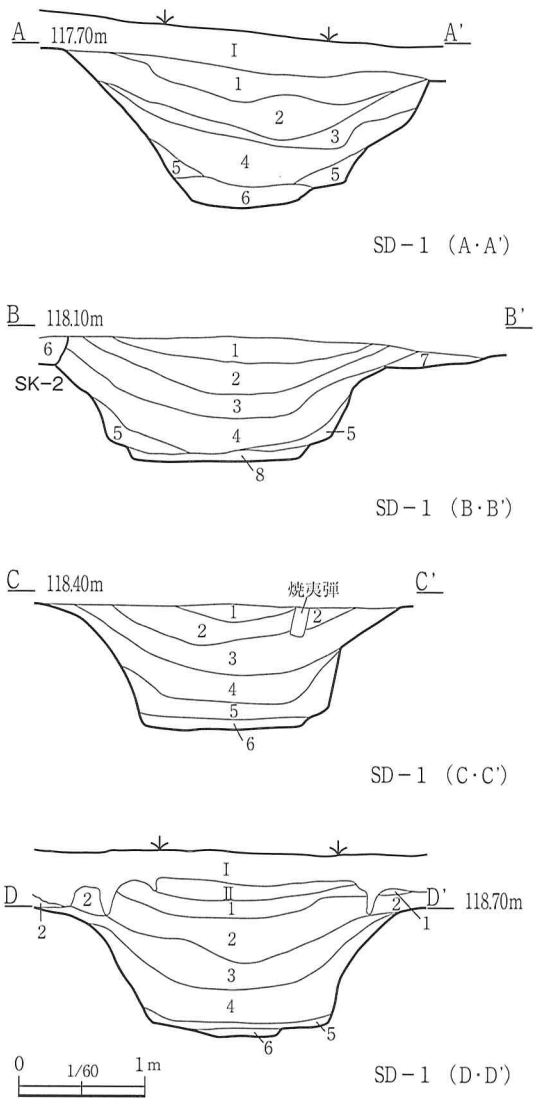
埋積土は５層に分けられ、他と同様に１・２層は締まりが強い。

遺物　埋積土層より須恵器３片が出土し、坏１片（１）を図示した。



第５図　調査区コンター図（１：200）

第６図　遺構配置図（１：120）



SD－1

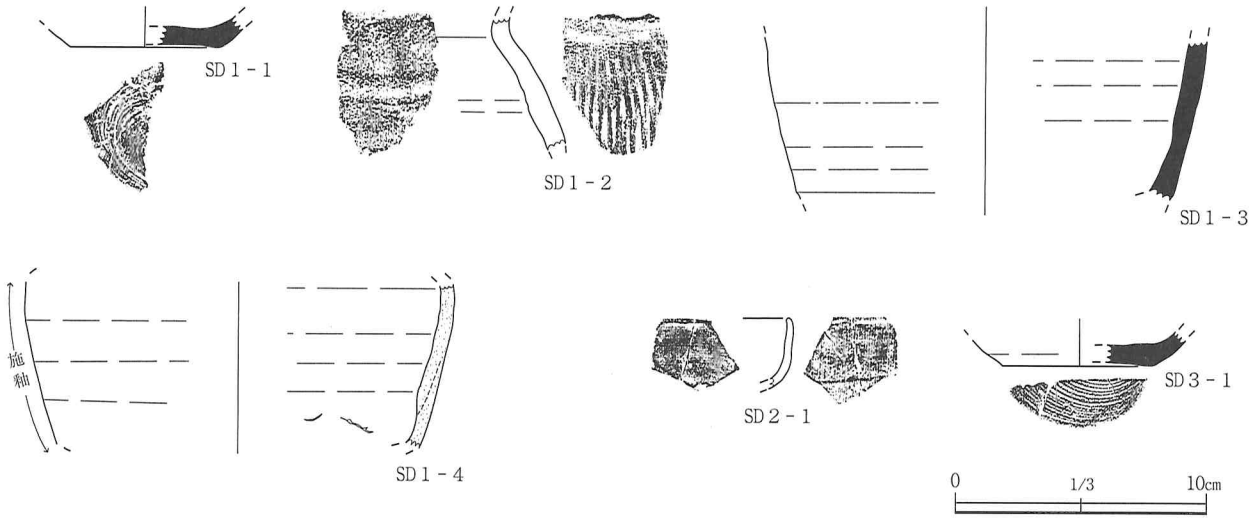
(A・A') Ⅰ．灰黄褐色土(10YR4/2)　植物根多、締まり弱い、表土層
1．灰黄褐色土(10YR5/2)　黒褐色土(10YR3/2) R・B(1～60㎜) 15%、LR(1～3㎜)・SP・IP(1～2㎜)微量含む、締まりあり
2．黒褐色土(10YR3/2)　灰黄褐色土(10YR4/2) R・B(1～30㎜) 10%、LR(1～2㎜) 3%、IP(1～2㎜)微量含む、締まり強い
3．暗褐色土(10YR3/4)　LR(1～2㎜) 10%、にぶい黄褐色土(10YR5/3) R・B(1～30㎜) 15%、IP(1～3㎜)微量含む、締まりあり
4．黒褐色土(10YR3/2)　にぶい黄褐色土(10YR5/3) R・B(1～30㎜) 15%、LR(1～3㎜) 5%含む、締まりあり
5．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　LR・B(1～30㎜) 20%含む、締まり弱い
6．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　灰黄褐色土(10YR4/2) R・B(1～30㎜) 10%、LR・B(1～60㎜) 40%含む、締まり強い、底面整地層

(B・B') 1．黒褐色土(10YR3/2)　LR・B(1～25㎜) 5%、SP・IP(1～10㎜)微量、にぶい黄褐色土(10YR5/3) 10%含む、締まり強い
2．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～2㎜) 3%、SP・IP(1～2㎜)微量含む、締まり強い
3．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR(1～2㎜) 20%、にぶい黄褐色土(10YR5/4) 15%含む、締まりあり
4．黒褐色土(10YR3/1)　LR(1～3㎜) 8%、にぶい黄褐色土(10YR5/3) 10%含む、締まりあり
5．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR・B(1～30㎜) 25%、黒褐色土(10YR3/2) R・B(1～30㎜) 15%含む、締まり弱い
6．黒褐色土(10YR3/2)　灰黄褐色土(10YR5/2) R・B(1～30㎜) 5%、LR・B(1～50㎜) 3%、CR(1～10㎜) 2%、黒色土(10YR2/1) R・B(1～30㎜) 20%含む、締まり弱い(SK－2)
7．暗褐色土(10YR3/4)　LR(1～3㎜) 5%含む、締まりあり
8．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR・B(1～40㎜) 50%含む、締まり強い(底面整地層)

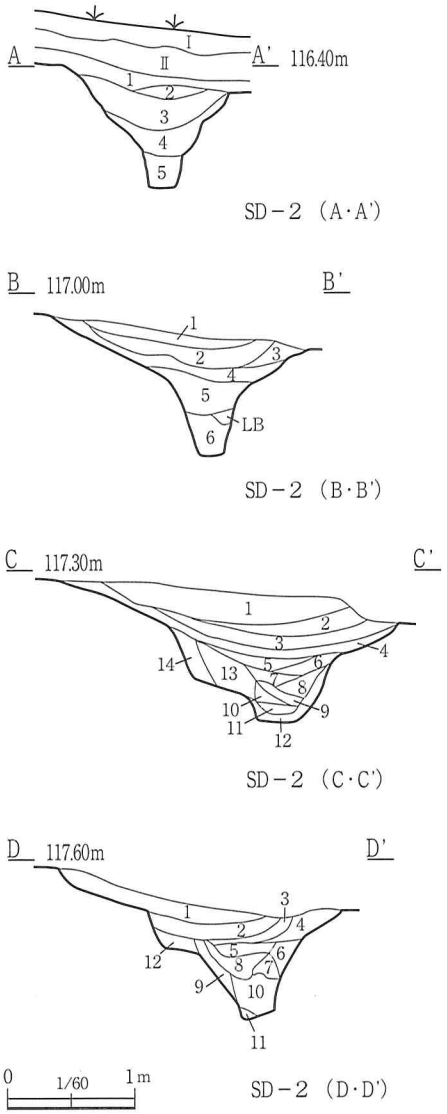
(C・C') 1．褐灰色土(10YR4/1)　LR・IP(1～2㎜)微量含む、締まり強い
2．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～2㎜) 5%、SP・IP(1～5㎜)微量含む、締まり強い
3．暗褐色土(10YR3/4)　LR(1～2㎜) 15%、IP(1～2㎜)微量含む、締まりあり
4．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～10㎜) 10%、IP(1～5㎜)微量含む
5．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR・B(1～40㎜) 25%含む、締まり弱い
6．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR・B(1～40㎜) 40%含む、締まり強い(底面整地層)

(D・D') Ⅰ．暗褐色土(10YR3/3)　締まり強い(耕作土)
Ⅱ．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～3㎜)微量含む、締まりあり
1．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～10㎜) 5%、灰黄褐色土(10YR4/2) 30%含む、締まり強い
2．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～5㎜) 3%、IP(1～5㎜)微量含む、締まり強い
3．褐灰色土(10YR4/1)　LR(1～5㎜) 20%、IP(1～3㎜)微量含む、締まりあり
4．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR・B(1～20㎜) 20%、IP(1～5㎜)微量含む、締まりあり
5．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR・B(1～30㎜) 35%、黒褐色土(10YR3/2) R・B(1～25㎜) 20%含む、締まりあり
6．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR・B(1～40㎜) 40%含む、締まり強い(底面整地層)

第７図　SD－１土層（A・A'、B・B'、C・C'、D・D'）



第８図　溝跡出土遺物



SD－2

(A・A') Ⅰ．灰黄褐色土(10YR4/2)　植物根多、締まり弱い
Ⅱ．黒褐色土(10YR3/2)　灰黄褐色土(10YR5/2) R・B (1～30 mm) 20%含む、締まりあり
1．黒褐色土(10YR3/1)　LR (1～10 mm) 8%、SP・IP (1～5 mm) 少量含む、締まり弱い
2．黒褐色土(10YR3/2)　LR・IP (1～2 mm) 微量含む
3．黒褐色土(10YR3/1)　灰黄褐色土(10YR5/2) R・B (1～30 mm) 10%、LR (1～10 mm) 5%、IP (1～5 mm) 微量含む、締まり強い
4．黒褐色土(10YR3/2)　LR (1～2 mm) 少量、IP (1～10 mm) 微量含む、締まりあり
5．黒褐色土(10YR3/2)　LR・B (1～35 mm) 15%、IP (5～30 mm) 5%含む、締まりあり

(B・B') 1．黒褐色土(10YR3/1)　LR (1～5 mm) 微量含む、締まり強い
2．にぶい黄褐色土(10YR4/2)　LR・B (1～60 mm) 45%含む、締まり強い
3．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR・B (1～20 mm) 8%含む、締まりあり
4．黒褐色土(10YR3/2)　LR・B (1～30 mm) 10%、灰褐色土(10YR4/6) R・B (1～30 mm) 20%含む、締まりあり
5．黒褐色土(10YR3/2)　LR (1～10 mm) 5%、IP (1～5 mm) 微量含む、締まりあり
6．黒褐色土(10YR3/2)　LR・B (1～30 mm) 20%含む、締まりあり

(C・C') 1．暗褐色土(10YR3/3)　LR (1～2 mm) 微量含む、締まりあり
2．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　LR・B (1～25 mm) 20%、黒褐色土(10YR3/2) R・B (1～20 mm) 15%含む、締まり強い
3．褐灰色土(10YR4/1)　灰黄褐色土(10YR5/2) R・B (1～30 mm) 25%含む、締まり強い
4．灰黄褐色土(10YR5/2)　黒褐色土(10YR3/2) R・B (1～30 mm) 15%、LR・B (1～20 mm) 5%含む、締まりあり
5．黒褐色土(10YR3/2)　LR (1～10 mm) 8%含む、締まりあり
6．暗褐色土(10YR3/4)　黒褐色土(10YR3/2) R (1～10 mm) 10%含む、締まりあり
7．黒褐色土(10YR3/2)　LR (1～5 mm) 5%含む、締まりあり
8．灰黄褐色土(10YR4/2)　黒褐色土(10YR3/2) R・B (1～20 mm) 10%含む、締まりあり
9．黒褐色土(10YR3/2)　LR (1～10 mm) 5%含む、締まりあり
10．暗褐色土(10YR3/4)　LR (1～10 mm) 8%、IP (1～5 mm) 微量含む、締まりあり
11．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR (1～10 mm) 20%含む、締まりあり
12．暗褐色土(10YR3/4)　LR・B (1～40 mm) 35%、黒褐色土(10YR3/2) R・B (1～25 mm) 5%含む、締まりあり
13．暗褐色土(10YR3/4)　LR・B (1～40 mm) 30%、黒褐色土(10YR3/2) R・B (1～30 mm) 15%含む、締まりあり
14．暗褐色土(10YR3/4)　LR (1～10 mm) 10%含む、締まりあり

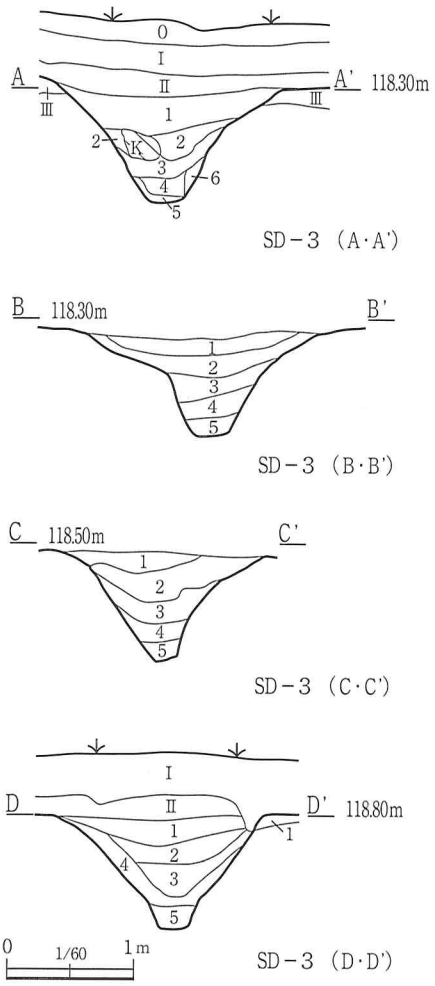
(D・D') 1．暗褐色土(10YR3/3)　LR (1～10 mm) 15%含む、締まりあり
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR・B (～40 mm) 40%、灰黄褐色土(10YR5/2) R・B (1～25 mm) 10%含む、締まり非常に強い
3．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR・B (1～25 mm) 15%、黒褐色土(10YR3/2) R・B (～20 mm) 5%含む、締まり強い
4．灰黄褐色土(10YR5/2)　灰黄褐色土(10YR4/2) R・B (1～20 mm) 10%含む、締まりあり
5．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR (1～10 mm) 20%含む、締まりあり
6．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR (1～10 mm) 30%含む、締まりあり
7．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　LR・B (1～20 mm) 35%含む、締まりあり
8．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR (1～5 mm) 8%、黒褐色土(10YR3/2) R (1～10 mm) 5%含む、締まりあり
9．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　LR・B (1～30 mm) 30%、黒褐色土(10YR3/2) R (1～10 mm) 5%含む、締まりあり
10．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR (1～10 mm) 20%、黒褐色土(10YR3/2) R・B (1～20 mm) 5%含む、締まりあり
11．にぶい黄橙色土(10YR6/4)　ローム主体、にぶい黄褐色土(10YR4/3) R (1～10 mm) 8%含む、締まりあり
12．暗褐色土(10YR3/3)　LR・B (1～30 mm) 20%含む、締まりあり

第９図　SD－２土層（A・A'、B・B'、C・C'、D・D'）

第２表　溝跡出土遺物観察表

（　）推定値　［　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・器高・底径	遺存度	整形・手法等	胎土, 焼成, 色調	備　考
SD1-1	須恵器 坏	口径　— 器高　[1.3] 底径　(6.0)	底部断片 底部30%	ロクロ整形、底部糸切り	胎土　白色砂、黒色発泡痕 焼成　普通 色調　内外 灰黄色(2.5Y6/2)	中央埋積土上層
SD1-2	土師器 甕	口径　— 器高　[5.3] 底径　—	体部断片	内面横ヘラナデ、外面タタキ	胎土　長石、白色・褐色粒 焼成　あまい 色調　内外 にぶい黄橙色(10YR7/4)	南埋積土上層 二次被熱
SD1-3	須恵器 壺	口径　— 器高　[6.3] 底径　—	体部断片	ロクロ整形、体部外面の下端ヘラ削り、内面に降灰を認める	胎土　長石、黒色発泡痕目立つ 焼成　良好 色調　内 灰色(7.5YR6/1)・外 灰褐色(5YR 5/2)	南埋積土上層
SD1-4	灰釉陶器 壺	口径　— 器高　[6.6] 底径　—	体部断片	ロクロ整形、体部外面ヘラ削り、体部下位に成形時の接合痕	胎土　精良 焼成　普通、釉は発色不良 色調　内 灰白色(2.5Y7/1)・外 灰白色(10 YR8/2)	北埋積土上層
SD2-1	土師器 坏	口径　— 器高　[2.8] 底径　—	口辺・体部断片	輪積み、内面と内辺部外面横ナデ仕上げ、体部外面ヘラ削り	胎土　細砂粒 焼成　普通 色調　内外 橙色(5YR6/6)	北埋積土上層
SD3-1	須恵器 坏	口径　— 器高　[1.3] 底径　(6.1)	底部断片 底部30%	ロクロ整形、底部糸切り	胎土　砂・黒色粒 焼成　普通 色調　内外 灰色(5Y6/1)	北東埋積土上層



SD－3（A·A'）

SD－3
(A·A') O．整地土（バチンコ屋工事）
Ⅰ．灰黄褐色土（10YR4/2）　やや締まりあり（工事の関係？）
Ⅱ．黒褐色土（10YR3/2）　LR（1～5㎜）5%、にぶい黄褐色土（10YR5/4）R·B（1～20㎜）15%含む、締まりあり
Ⅲ．黒褐色土（10YR2/2）　IP（1～10㎜）少量、LR（1～5㎜）微量含む、締まりあり
1．黒褐色土（10YR3/2）　灰黄褐色土（10YR5/2）R·B（1～30㎜）20%、SP·IP（1～5㎜）微量含む、締まり強い
2．黒褐色土（10YR3/1）　灰黄褐色土（10YR5/2）R·B（1～20㎜）25%、LR（1～10㎜）5%、SP·IP（1～5㎜）微量含む、締まりあり
3．暗褐色土（10YR3/4）　黒褐色土（10YR3/2）R·B（1～30㎜）20%、LR（1～10㎜）10%含む、締まりあり
4．黒褐色土（10YR3/2）　LR·B（1～30㎜）25%、灰黄褐色土（10YR4/2）R·B（1～25㎜）15%含む、締まりあり
5．黒褐色土（10YR3/1）　LR·B（1～50㎜）35%、灰黄褐色土（10YR4/2）R·B（1～25㎜）20%含む

SD－3（B·B'）

(B·B') 1．黒褐色土（10YR3/1）　LR（1～5㎜）・SP·IP（1～3㎜）微量含む、締まりあり
2．黒褐色土（10YR3/2）　LR·B（1～20㎜）5 %、SP·IP（1～3㎜）微量含む、締まり非常に強い
3．黒褐色土（10YR3/2）　LR（1～10㎜）3%、SP·IP（1～2㎜）微量含む、締まりあり
4．黒褐色土（10YR3/1）　LR（1～10㎜）微量含む、締まりあり
5．LR·B（1～60㎜）主体、黒褐色土（10YR3/2）40%含む、締まりあり（底面整地層）

SD－3（C·C'）

(C·C') 1．黒褐色土（10YR3/1）　LR（1～3㎜）・SP·IP（1～2㎜）微量含む、締まりあり
2．黒褐色土（10YR3/2）　LR·B（1～30㎜）20%、黒色土（10YR2/1）R·B（1～40㎜）8%、SP·IP（1～5㎜）微量含む、締まり非常に強い
3．暗褐色土（10YR3/3）　LR·B（1～30㎜）15%、SP·IP（1～5㎜）微量含む
4．黒褐色土（10YR3/2）　LR·B（1～20㎜）5%含む、締まりあり
5．灰黄褐色土（10YR4/2）　LR（1～10㎜）25%含む、締まりあり

SD－3（D·D'）

(D·D') Ⅰ．暗褐色土（10YR3/3）　耕作土、締まり弱い
Ⅱ．黒褐色土（10YR3/2）　LR（1～10㎜）5%、灰黄褐色土（10YR4/2）30%含む、締まり強い
1．黒褐色土（10YR3/2）　LR（1～10㎜）8%、SP·IP（1～5㎜）微量含む、締まり強い
2．暗褐色土（10YR3/3）　LR（1～10㎜）20%、黒褐色土（10YR3/2）R·B（1～30㎜）15%含む、締まり強い
3．黒褐色土（10YR3/1）　LR·B（1～50㎜）20%、灰黄褐色土（10YR5/2）R·B（1～40㎜）20%含む、締まりあり
4．暗褐色土（10YR3/3）　LR·B（1～30㎜）10%、黒褐色土（10YR3/2）R·B（1～30㎜）15%含む、締まりあり
5．暗褐色土（10YR3/3）　LR·B（1～20㎜）15%含む、締まりあり

第10図　SD－3土層（A·A'、B·B'、C·C'、D·D'）

第2節　竪穴建物跡

今次調査区で確認された竪穴建物跡はSI－1が1軒のみである。

SI－1（第11・12図、図版1・2・5、第3表）

遺構　調査区の中央やや南寄り、3C区に所在する。東側はSD－1と重複しこれを切る。平面形・規模は、一辺約3.8mの方形である。東壁はSD－1の埋積土中にあり平面観察では判然としなかった為、土層観察により判断した。壁は現存高25～30でほぼ直立する。壁下に壁溝を捉えることは出来なかった。床面は粗掘り後、ローム粒・塊を多く含む土で整地したもので、床面下に複数認められた。殊にSD－1との重複部分は床面下20cm程の所まで掘り下げ、ローム粒・塊混じりの土で整地してあったが、床面自体はロームによる貼床はまばらであった。柱穴は確認されなかった。

カマドは、北壁の中央やや東寄りに、幅120cm奥行き約70cmの逆U字状に掘り込み、灰白色粘土で築かれていた。また、北壁の位置が焚口と見られ、両袖部の先端には細長い河原石が袖芯として立てられた状態で遺存していた。さらに、カマドの中央には支脚用の河原石も原位置で遺存し、その先端には土師器台付甕の底部片（10B）が倒位で被せられていた。この支脚の手前より完形に近い須恵器坏（4）、東の壁際より胴部の一部を欠損した土師器甕（11）が出土した。移転に際する破壊儀礼によるものか。

埋積土は７層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物　須恵器22点、土師器47点が出土し、須恵器坏（１～８）・甕（12）、土師器坏（９）・台付甕（10A・B）・甕（11）などを図示した。須恵器は坏類が主体で底部切離しが糸切りとヘラ起こしが混在し、胎土の違いからも複数産地のものが存在する。土師器は甕・台付甕が多く、主体は所謂武蔵型であるが、下野型の破片や新治系の叩きを施したものも見られる。須恵器坏（１）は横位に「泉」、土師器坏（９）は倒位で「十万」もしくは「千万」の墨書が銘記されていた。この他にも釈読不可の細片が２片認められた。なお、１の坏は南東隅の床面直上より正位で出土しており、意図的に置き去ったものかと思われる。

本跡はこれらの遺物から９世紀後半代の所産と考えられる。

第３節　掘立柱建物跡・小穴類

今次調査区内より柱掘方・柱穴と考えられる遺構は８基確認した。これらは、径30～50cmの小型のもの（Ｐ－１～５）と、幅50～70cm、長さ110～125cm程の大型の２群である。残念ながら調査区内では、それぞれ１間分を想定したに過ぎない。

SB－１（第13図、図版4C・D）

遺構　調査区北東部、5・6F区に所在する。当初は土坑を想定して、SK－３・６・７としたが、土層観察から大型の柱掘方と判断した。それぞれ、平面形が一様では無く、底面も２段以上に分かれ、最も深い部分に柱痕跡が認められた。SK－３は東端、SK－６は中程、SK－７は西端にあり、深さは65～80cmと確りしている。周辺に組み合う柱掘方が認められず、詳細は不明である。仮にSK－３とSK－７とすれば4.2ｍ、SK－６とSK－７では3.8ｍ程の間隔となる。また、いずれも柱は垂直ではなく、やや傾いて立てられていたと推定され、SK－３は西、SK－６は南、SK－７は東への傾斜が認められる。

遺物の出土は無かった。

SB－２（第13・14図、図版4G・５、第４表）

遺構　調査区南東部、4C区に所在し、東西に約2.7ｍ（約９尺）隔てて並ぶ。西はSD－１、SI－１と重複し、東は調査区外となりそれぞれの広がりは確認されなかった。南約5.6ｍ（約19尺）のＰ－１と組み合う可能性も否めない。柱穴は径30～50cmの円形、深さ25～30cmであった。

遺物　Ｐ－３の埋積土中より須恵器の細片が２点出土し、うち１点（１）は墨書が認められるものの、釈読は出来なかった。

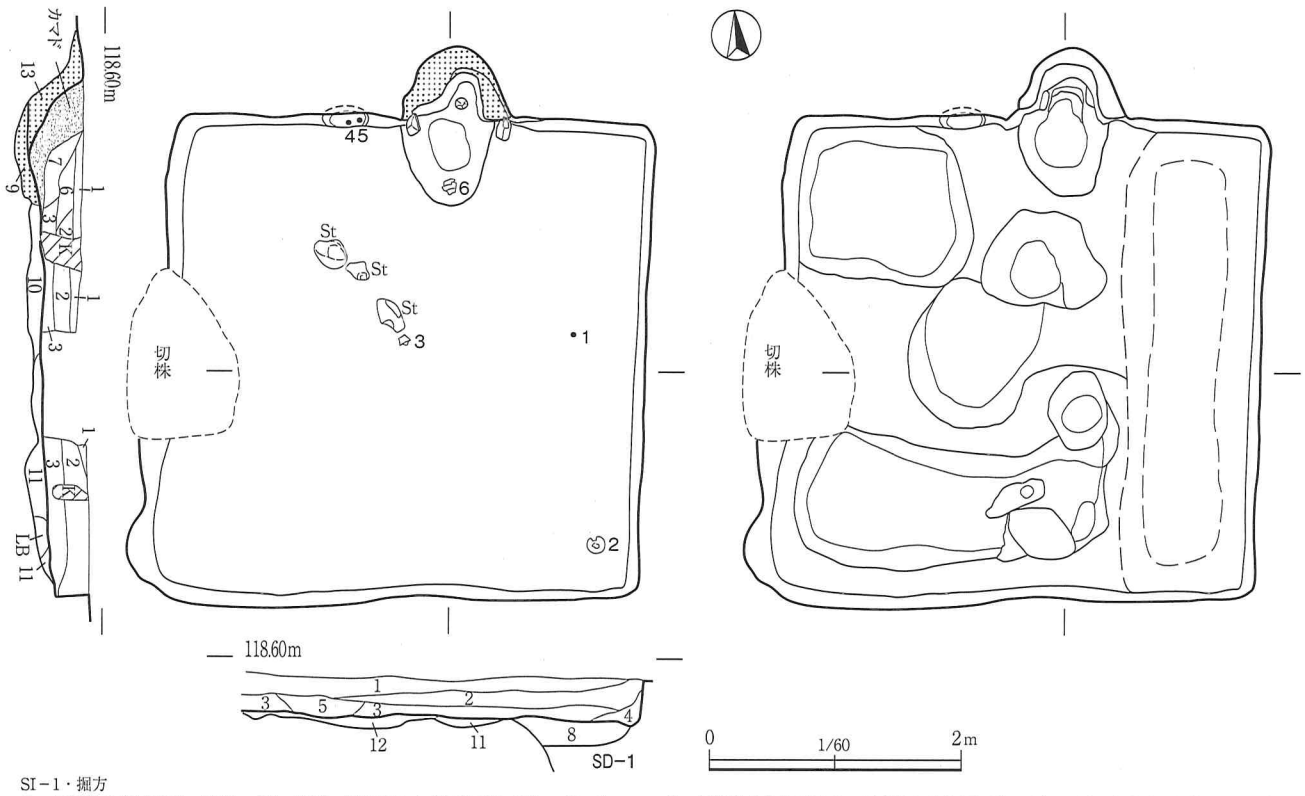
なお、Ｐ－４の埋積土からも須恵器坏の細片（１）が出土している。

第４節　土坑類

前記の通り当初は８基の土坑を想定したが、SK－３・６・７は柱掘方と見られる為除外し、土坑類は５基となった。しかし、これらのうち完掘出来たのはSK－１・２の２基で、他の３基は切株の真下にあって部分的調査に終わってしまった。性格不明遺構SX－１もここに含め報告する。

SK－１（第15図、図版3G）

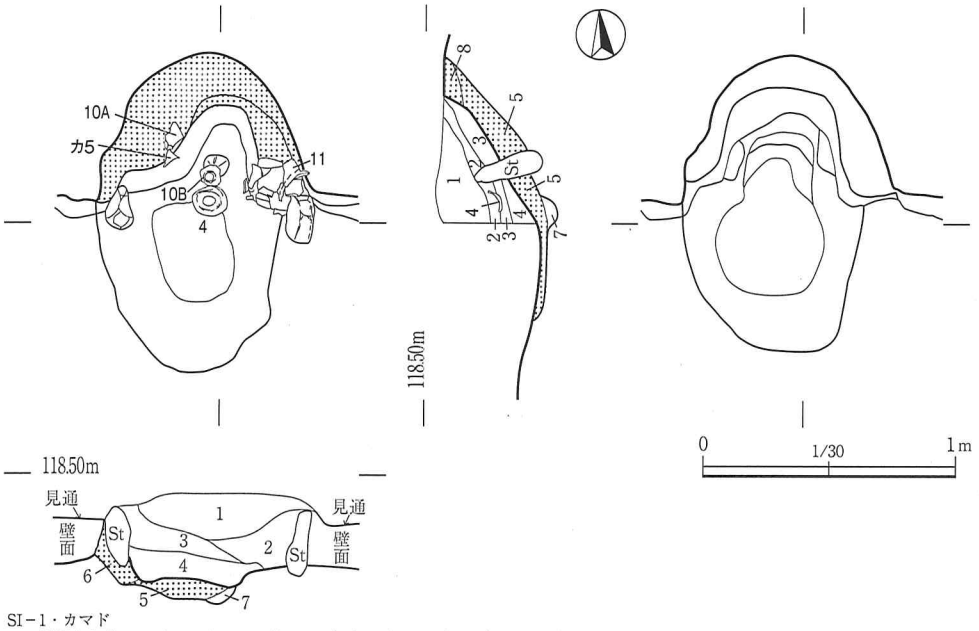
遺構　調査区北東部、6F区に所在する。SD－２と重複し、これを切る。平面形・規模は、開口部が径110



SI－1・掘方

1．褐灰色土(10YR4/1)　LR(1～10㎜)3%、灰黄褐色土(10YR4/2)R・B(1～20㎜)20%含む、締まりあり
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR(1～10㎜)8%、SP・IP(1～5㎜)微量、褐灰色土(10YR4/1)R・B(1～20㎜)15%含む、締まりあり
3．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR・B(1～20㎜)10%、褐灰色土(10YR4/1)R・B(1～20㎜)15%含む、締まりあり
4．黒褐色土(10YR3/2)　にぶい黄褐色土(10YR5/3)R・B(1～20㎜)10%、SP・IP(1～10㎜)微量含む、締まりあり
5．灰黄褐色土(10YR4/2)　にぶい黄褐色土(10YR5/3)R・B(1～20㎜)15%、LR(1～10㎜)10%含む、締まりあり
6．にぶい黄橙色土(10YR5/4)　灰黄褐色土(10YR5/2)R・B(1～20㎜)20%、LR(1～10㎜)30%、SR(1～10㎜)微量含む、カマド構築材、締まりあり
7．灰黄褐色土(10YR5/2)　灰黄褐色土(10YR4/2)R・B(1～20㎜)30%、SR(1～10㎜)微量含む、カマド構築材、6層との境に土師器片、締まりあり
8．暗褐色土(10YR3/3)　LR・B(1～30㎜)25%、黒褐色土(10YR3/2)R・B(1～30㎜)15%、褐黄褐色土(10YR5/2)R・B(1～25㎜)20%含む、締まりあり、床面構築土
9．暗褐色土(10YR3/4)　LR・B(1～30㎜)20%含む、締まりあり、カマド掘方整地土
10．暗褐色土(10YR3/3)　LR・B(1～50㎜)25%、黒褐色土(10YR3/2)R・B(1～30㎜)10%含む、締まり強い、床面構築土
11．黒褐色土(10YR3/2)　LR・B(1～40㎜)30%、灰黄褐色土(10YR4/2)R・B(1～30㎜)15%含む、締まり強い、床面構築土
12．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR・B(1～20㎜)20%、黒褐色土(10YR3/2)R・B(1～30㎜)15%含む、締まり強い、床面構築土
13．灰褐色土(7.5YR4/2)　LR・B(1～25㎜)8%、SR(1～5㎜)2%含む、締まりあり、カマド構築材

SI－1・掘方

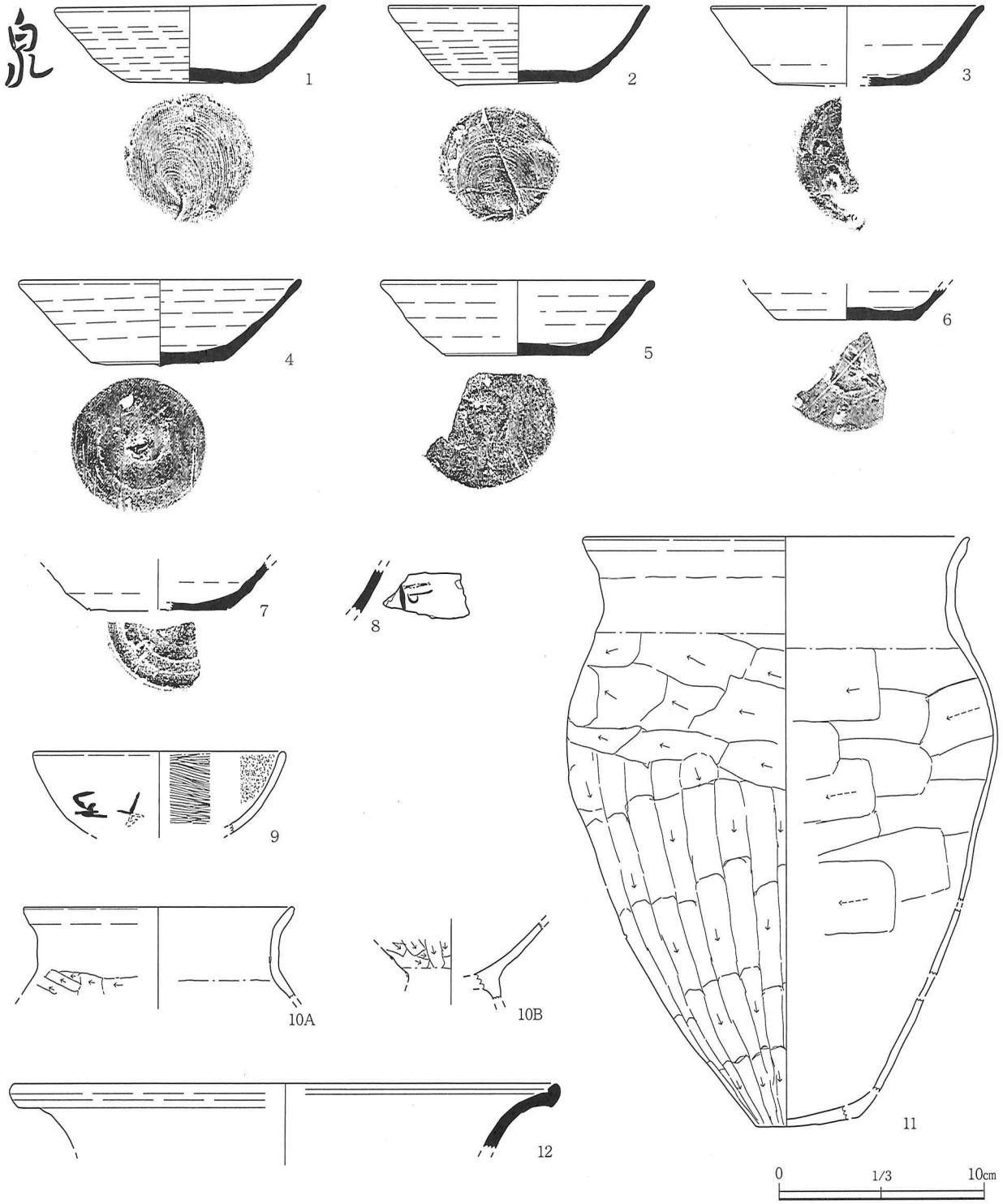


SI－1・カマド

1．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～3㎜)10%、橙色土(7.5YR6/6)R・B(1～20㎜)10%、SR(1～5㎜)微量含む、締まりあり
2．褐灰色土(7.5YR4/1)　LR・B(1～20㎜)8%、SR(1～5㎜)5%含む、締まりあり
3．にぶい褐色土(7.5YR5/4)　SR(1～10㎜)10%、黒褐色土(10YR3/2)R(1～10㎜)3%含む、締まりあり
4．にぶい橙色土(7.5YR6/4)　SR・B(1～20㎜)10%、にぶい褐色土(7.5YR5/4)R・B(1～20㎜)5%含む、締まりあり
5．灰褐色土(7.5YR4/2)　LR・B(1～25㎜)8%、SR(1～5㎜)2%含む、締まりあり、構築材
6．明黄褐色土(10YR6/6)　にぶい黄褐色土(10YR5/4)R(1～10㎜)15%、SR(1～2㎜)微量含む、締まりあり、構築材
7．褐灰色土(10YR5/1)　LR・B(1～30㎜)20%、SR(1～2㎜)微量含む、締まりあり
8．灰黄褐色土(10YR5/2)　SR(1～5㎜)8%、LR(1～10㎜)5%含む、締まりあり

SI－1カマド・掘方

第11図　SI－1・掘方、SI－1カマド・掘方

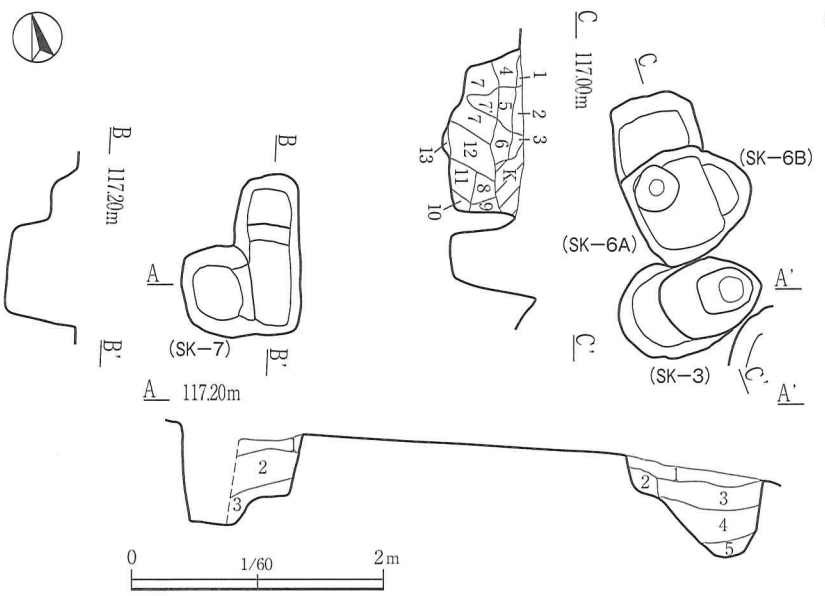


第12図　SI-1 出土遺物

第３表　SI－１出土遺物観察表

（　　）推定値　［　　］現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径・器高・底径	遺存度	整形・手法等	胎土, 焼成, 色調	備　　考
1	須恵器 坏	口径　13.2 器高　3.8 底径　6.6	95%	ロクロ整形、底部糸切り、体部外面ロクロ目多	胎土　白色・褐色粒、長石 焼成　ややあまい 色調　内外 褐灰色(10YR5/1)、にぶい黄橙色(10YR7/3)	No.2 体部外面墨書「泉」横位
2	須恵器 坏	口径　12.8 器高　3.7 底径　5.9	70%	ロクロ整形、底部糸切り、体部外面ロクロ目多	胎土　白色粒、長石 焼成　ややあまい 色調　内外 黒色(10YR2/1)、一部にぶい黄橙色(10YR7/3)	２区掘方
3	須恵器 坏	口径　(13.6) 器高　(3.9) 底径　(7.4)	30% 口辺～底部	ロクロ整形、底部糸切り	胎土　長石、チャート 焼成　ややもろい 色調　内外 にぶい黄橙色(10YR7/2)・(10YR7/3)	No.3 二次被熱
4	須恵器 坏	口径　13.6 器高　4.3 底径　6.6	75%	ロクロ整形、底部ヘラ起こし後ナデ、底部重ね焼による変色	胎土　長石、白色粒 焼成　良好 色調　内外 体部青黒色(5PB2/1)、底部灰赤色(2.5YR5/2)	カNo.2 底部内外面磨滅
5	須恵器 坏	口径　(13.2) 器高　(3.2) 底径　(7.2)	35% 口辺～底部	ロクロ整形、底部ヘラ起こし後ナデ・板目状圧痕	胎土　長石、白色粒 焼成　良好 色調　内外 灰色(5Y4/1)、褐灰色(7.5YR4/1)	３区掘方、1・2区埋積土 底部外面ヘラ記号「×」、益子産か、見込み部分磨滅
6	須恵器 坏	口径　— 器高　[1.6] 底径　(7.0)	20% 体・底部	ロクロ整形、底部ヘラ起こし	胎土　長石、チャート、断面に白色の薄い層を認める 焼成　良好 色調　内外 黄灰色(2.5Y4/1)	１区埋積土 底部外面ヘラ記号「×」、益子産か
7	須恵器 坏	口径　— 器高　[1.2] 底径　(6.8)	20% 体・底部	ロクロ整形、底部ヘラ起こし、体・底部の境に沈線廻る	胎土　長石、チャート、断面に白色の薄い層を認める 焼成　良好 色調　内外 灰色(7.5Y5/1)	３区埋積土 益子産か
8	須恵器 坏	口径　— 器高　[2.1] 底径　—	体部断片	ロクロ整形	胎土　長石、白色粒 焼成　良好 色調　内外 灰色(5Y5/1)	１区埋積土 体部外面墨書、不詳
9	土師器 坏	口径　(12.2) 器高　[4.1] 底径　—	口辺・体部の40%遺存 (接合できず)	ロクロ整形、内面ミガキ、黒色処理	胎土　白色粒、長石、チャート 焼成　良好 色調　内 黒色(N2/0)・外 橙色(5YR6/8)	１区埋積土、体部墨書「千万」か、倒位、内面磨滅無く使用短期か
10A	土師器 台付甕	口径　(13.2) 器高　[4.4] 底径　—	口辺・体部断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ仕上げ、体部外面横にヘラ削り、同内面横ヘラナデ	胎土　粗砂・褐色粒 焼成　普通 色調　内外 明赤褐色(2.5YR5/6)	カNo.4、１区埋積土 二次被熱により器面の荒れ目立つ
10B	土師器 台付甕	口径　— 器高　[4.7] 底径　—	体部～台脚部断片	輪積み、体部外面ヘラ削り、他は器面の荒れ著しく不詳	胎土　石英、長石、褐色粒 焼成　普通 色調　内 橙色(7.5YR6/6)・外 にぶい赤褐色(5YR4/3)	カNo.3、支脚部材に転用 二次被熱により器面荒れる
11	土師器 甕	口径　19.0 器高　29.0 底径　(4.9)	70%	輪積み、口辺部内外面横ナデ仕上げ、体部外面上位横、中下位縦ヘラ削り、体・底部内面ヘラナデ、底部外面ヘラ削り	胎土　長石、褐色粒 焼成　良好 色調　内外 橙色(2.5YR6/8)、一部黒褐色(5YR3/1)	カNo.1
12	須恵器 甕	口径　(26.8) 器高　[3.2] 底径　—	口辺部断片	ロクロ整形、口縁内側に折り返す	胎土　石英、白色粒、雲母細片 焼成　普通(いぶし焼) 色調　内 褐灰色(10YR4/1)・外 黒色(10YR1/1)	１区埋積土

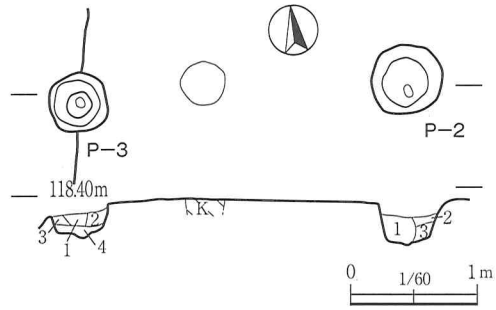


SB－1（SK－6A,C･C'）
1．褐灰色土（10YR4/1）　黒褐色土（10YR3/1）R（1～10㎜）20%、LR（1～2㎜）微量含む、締まりあり
2．灰黄褐色土（10YR4/2）　褐灰色土（10YR5/1）R･B（1～30㎜）15%、LR（1～10㎜）10%含む、締まりあり
3．黒褐色土（10YR3/2）　LR･B（1～40㎜）20%、にぶい黄橙色土（10YR6/4）R･B（1～20㎜）10%含む、締まり強い
4．灰黄褐色土（10YR4/2）　LR･B（1～50㎜）25%、黒褐色土（10YR3/1）R･B（1～25㎜）10%、SP（1～5㎜）微量、IP（1～10㎜）2%含む、締まりあり
5．灰黄褐色土（10YR4/2）　LR（1～5㎜）15%、黒褐色土（10YR 3/1）R（1～10㎜）8%含む、締まりあり
6．褐灰色土（10YR5/1）　LR･B（1～20㎜）15%、黒褐色土（10 YR3/1）R･B（1～20㎜）15%含む、締まり強い
7．LR･B（1～60㎜）主体　灰黄褐色土（10YR5/2）R･B（1～30㎜）20%、黒褐色土（10YR3/1）R･B（1～30㎜）20%、SP･IP（1～10㎜）微量含む、締まり強い
7'．LR･B少ない
8．灰黄褐色土（10YR5/2）　LR･B（1～40㎜）25%、黒褐色土（10YR3/1）R･B（1～30㎜）15%含む、締まり強い
9．灰黄褐色土（10YR5/2）　LR･B（1～30㎜）20%、IP（1～10㎜）微量含む、締まりあり
10．明黄褐色土（10YR6/6）　にぶい黄橙色土（10YR6/4）R･B（1～20㎜）20%含む、締まりあり
11．黒褐色土（10YR3/1）　LR･B（1～80㎜）30%、灰黄褐色土（10YR4/2）R･B（1～30㎜）15%含む、締まり強い
12．黒褐色土（10YR3/2）　LR（1～10㎜）8%、IP（1～10㎜）微量含む、締まり弱い
13．にぶい黄橙色土（10YR7/4）　LR･B（1～60㎜）40%、灰黄褐色土（10YR5/2）R･B（1～30㎜）20%含む、締まりあり

SB－1（SK－7，A･A'左）
1．灰黄褐色土（10YR5/2）　LR（1～10㎜）8%、黒褐色土（10YR3/2）R（1～10㎜）3%含む、締まりあり
2．灰黄褐色土（10YR5/2）　LR･B（1～50㎜）15%、黒褐色土（10YR3/2）R･B（1～40㎜）10%含む、締まりあり
3．黒褐色土（10YR3/2）　LR･B（1～40㎜）25%、灰黄褐色土（10YR4/2）R･B（1～30㎜）20%含む、締まり強い

SB－1（SK－3，A･A'右）
1．褐灰色土（10YR4/1）　LR（1～2㎜）・SP･IP（1～3㎜）微量含む、締まりあり
2．黒褐色土（10YR3/1）　LR（1～5㎜）微量含む、締まりあり
3．黒褐色土（10YR3/2）　LR･B（1～40㎜）15%含む、締まりあり
4．黒褐色土（10YR3/1）　LR･B（1～20㎜）5%含む、締まりあり
5．にぶい黄褐色土（10YR5/4）　LR･B（1～30㎜）30%、黒褐色土（10YR3/2）R･B（1～20㎜）15%含む、締まりあり

SB－1（SK－3・6A・6B・7）

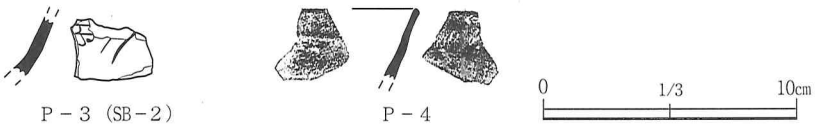


SB－2（P－2）
1．黒褐色土（10YR3/2）　LR（1～10㎜）3%含む、締まり弱い
2．黒褐色土（10YR3/2）　LR･B（1～20㎜）20%含む、締まりあり
3．灰黄褐色土（10YR4/2）　LR･B（1～20㎜）25%含む、締まりあり

SB－2（P－3）
1．黒褐色土（10YR3/2）　LR（1～5㎜）3%含む、締まりあり
2．黒褐色土（10YR3/2）　LR･B（1～20㎜）20%含む、締まりあり
3．灰黄褐色土（10YR4/2）　LR･B（1～40㎜）30%含む、締まりあり
4．にぶい黄橙色土（10YR6/4）　灰黄褐色土（10YR5/2）R･B（1～20㎜）25%含む、締まりあり

SB－2（P－2・3）

第13図　SB－1（SK－3・6A・6B・7）・SB－2（P－2・3）



P－3（SB－2）　　P－4

第14図　小穴出土遺物

第4表　小穴出土遺物観察表

（　）推定値　[　]現存値

No.	種別 器種	大きさ（cm） 口径･器高･底径	遺存度	整形・手法等	胎土, 焼成, 色調	備　考
P－3 (SB−2)	須恵器 坏	口径 — 器高 [2.2] 底径 —	体部断片	ロクロ整形	胎土　細砂、黒色発泡痕 焼成　普通 色調　内外 灰白色(2.5Y7/1)	埋積土 体部外面墨書、不詳
P－4	須恵器 坏	口径 — 器高 [2.8] 底径 —	口辺部断片	ロクロ整形	胎土　長石、白色粒、黒色発泡痕 焼成　普通 色調　内外 灰黄色(2.5Y6/2)	埋積土

～115cmのほぼ円形、深さ15～25cm、壁は外傾し、底面は平坦であった。埋積土は２層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

SK－２（第15図）

遺構　調査区の中央やや北寄りの3E区に所在する。東側がSD－１と重複し、これを切る。平面形･規模は、開口部が約105～170cmの不整楕円形、深さ15～20cm、壁は東が急傾斜であるが他はなだらかで、底面はほぼ平坦であった。埋積土は単層で自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

SK－４（第15図、図版4A）

遺構　調査区北東部、5E区に所在する。南東部は切株の直下にあり調査し得なかった。平面形・規模は、前記の状況により明確にし難いが、開口部は南北長140cm、現存東西長110cmの楕円形と推定される。深さ25～30cm、壁は直立ぎみに立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。埋積土は４層に分けられ、南西部に後世の掘り込みが認められた。

遺物　埋積土中より土師器が２片出土したが、図示し得るものは無かった。

SK－５（第15図、図版4B）

遺構　調査区北東部、5E区に所在する。西半部は切株の直下にあり調査し得なかった。平面形・規模は、前記の状況により明確にし難いが、開口部は南北長約94cm、現存東西長約48cmの円形と推定される。深さ約40cm、壁はほぼ直立し、底面は平坦であった。埋積土は３層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

SK－８（第15図、図版4E）

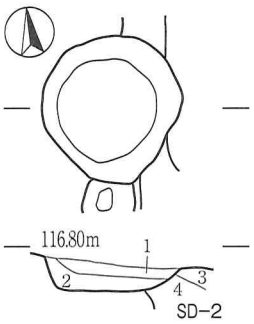
遺構　調査区北端の中程､4F区に所在する。南西部は切株の直下にあり調査し得なかった。平面形･規模は、前記の状況により明確にし難いが、開口部は北西・南東長約76cm、現存北東・南西長約31cmの丸味を帯びた方形と推定され、深さ約30cm、壁はほぼ直立し、底面は平坦であった。埋積土は２層に分けられ、自然埋没である。

遺物の出土は無かった。

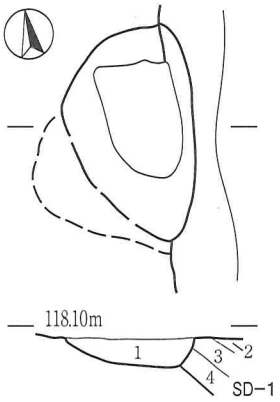
SX－１（第15図、図版4F）

遺構　調査区北端の中央やや西寄り、2･3G区に跨がって所在する。大部分が調査区外にあって南端の極一部を確認したに過ぎない。現存東西長約2.4ｍ、同南北長約55cm、深さ50cm以上、壁は外傾する。他の土坑類に比べ著しく大型であり性格不明遺構としたが、規模的には円形有段土坑や井戸跡等の外縁部の可能性を想定したい。埋積土は現状で３層確認したが、詳細は不明である。

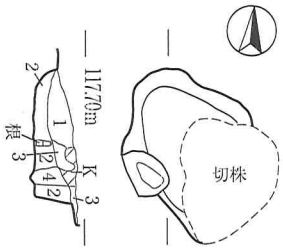
遺物の出土は無かった。



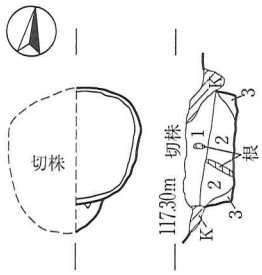
SK－1



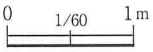
SK－2

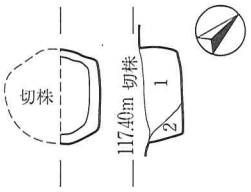


SK－4



SK－5





SK－8

SK－1
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR･B(1～30㎜)8%含む、締まりあり
2．褐灰色土(10YR4/1)　LR(1～3㎜)･黒褐色土(10YR2/2)R(1～10㎜)3%、灰黄褐色土(10YR4/2)R･B(1～30㎜)20%含む、締まりあり
3．黒褐色土(10YR3/2)　灰黄褐色土(10YR4/2)R(1～10㎜)15%含む、締まり強い(SD－2)
4．黒褐色土(10YR3/1)　LR(1～10㎜)20%含む、締まり強い(SD－2)

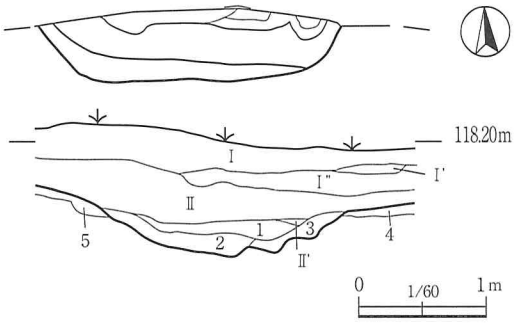
SK－2
1．黒褐色土(10YR3/2)　灰黄褐色土(10YR5/2)R･B(1～30㎜)5%、LR･B(1～50㎜)3%、CR(1～10㎜)2%、黒色土(10YR2/1)R･B(1～30㎜)20%含む、締まり弱い
2．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～2㎜)3%、SP･IP(1～2㎜)微量含む、締まり強い(SD－1)
3．灰黄褐色土(10YR5/2)　LR(1～2㎜)20%、にぶい黄褐色土(10YR5/4)15%含む、締まりあり(SD－1)
4．黒褐色土(10YR3/1)　LR(1～3㎜)8%、にぶい黄褐色土(10YR5/3)10%含む、締まりあり(SD－1)

SK－4
1．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～10㎜)10%含む、締まりあり
2．褐灰色土(10YR4/2)　LR(1～10㎜)20%含む、締まりあり
3．黒褐色土(10YR3/2)　LR･B(1～20㎜)35%含む、締まりあり
4．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR･B(1～30㎜)25%含む、締まりあり

SK－5
1．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR(1～10㎜)8%含む、締まりあり
2．黒褐色土(10YR3/2)　LR･B(1～20㎜)15%、灰黄褐色土(10YR5/2)R･B(1～20㎜)15%含む、締まりあり
3．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　LR･B(1～20㎜)25%含む、締まりあり

SK－8
1．黒褐色土(10YR3/2)　LR･B(1～30㎜)15%含む、締まりあり
2．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～10㎜)3%含む、締まりあり

SK－1・2・4・5・8



SX－1
Ⅰ．灰黄褐色土(10YR4/2)　LR(1～5㎜)微量含む、植物根多、締まり弱い、表土層
Ⅰ'．にぶい黄褐色土(10YR5/3)　褐灰色土(10YR4/1)R･B(1～20㎜)25%含む、締まりあり
Ⅰ"．褐灰色土(10YR4/1)　LR(1～3㎜)微量含む、締まり弱い
Ⅱ．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～5㎜)8%、SP･IP(1～3㎜)微量含む、締まりあり
Ⅱ'．褐灰色土(10YR4/1)　LR(1～3㎜)10%含む、締まりあり
1．黒褐色土(10YR3/2)　黒褐色土(10YR3/1)R･B(1～30㎜)15%、LR(1～10㎜)10%含む、締まりあり
2．灰黄褐色土(10YR4/2)　にぶい黄褐色土(10YR5/3)R･B(1～30㎜)15%、LR(1～3㎜)5%含む、締まりあり
3．にぶい黄褐色土(10YR4/3)　LR･B(1～30㎜)30%含む、締まりあり
4．暗褐色土(10YR3/4)　LR･B(1～5㎜)20%含む、締まりあり
5．黒褐色土(10YR3/2)　LR(1～10㎜)25%含む、締まりあり

SX－1

第15図　SK－1・2・4・5・8、SX－1

第４章　総括

第１節　土地利用の変遷

旧石器時代　本遺跡及び近隣では該期の遺構・遺物とも管見にふれたものは無かった。

縄文時代　今次調査区では遺構・遺物とも確認されなかったが、第Ⅰ次調査区においては、早・前期頃、中期末葉、後期の土坑、中期後葉の竪穴建物跡１軒などが確認され、前期～晩期にわたる土器片が少量出土した。また、南に隣接する上野遺跡第Ⅱ次調査区でも小型の竪穴建物跡が２軒確認され、早期から晩期にわたる土器片等が出土している。このように、台地縁辺部に小規模な集落の形成が認められる。

弥生・古墳時代　これらの時代においても本遺跡では土地利用の形跡は認められなかった。しかし、前述の如く西側一帯は未調査のまま工業団地の造成が行われており、全く存在しなかったか否かは判然としない。

奈良・平安時代　本遺跡及び南の上野遺跡においても、この時代が調査対象の主体であった。その中心となるのが、推定東山道の側溝である。南に隣接する上野遺跡第Ⅰ次調査区で２条、同第Ⅱ次調査区で３条の溝跡が確認されている。これらのうち、東端に位置するSD－１の延長と見られる溝跡が本遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査区でも確認されており、推定部分を含めた総延長は約435ｍに及ぶ。また、この溝跡が、南端ではSD－２と平行に延びるが、北に向かうに従い、東に逸れてしまう状況が確認された。当地付近に「衣川駅家」を比定する説もあることから、道幅の広がりと「駅家」の存在の可能性が推測されている。なお、本遺跡においては前記のSD－１の西約２ｍに併走するように設けられた細い溝跡が確認された。今次調査では、その北端がほぼ直角に折れて西進することが判明した。また、新たにSD－１の東方約10ｍの台地縁辺部に、南北に延びる溝跡が確認されるとともに、SD－１を切って構築された平安時代の竪穴建物跡も認められた。

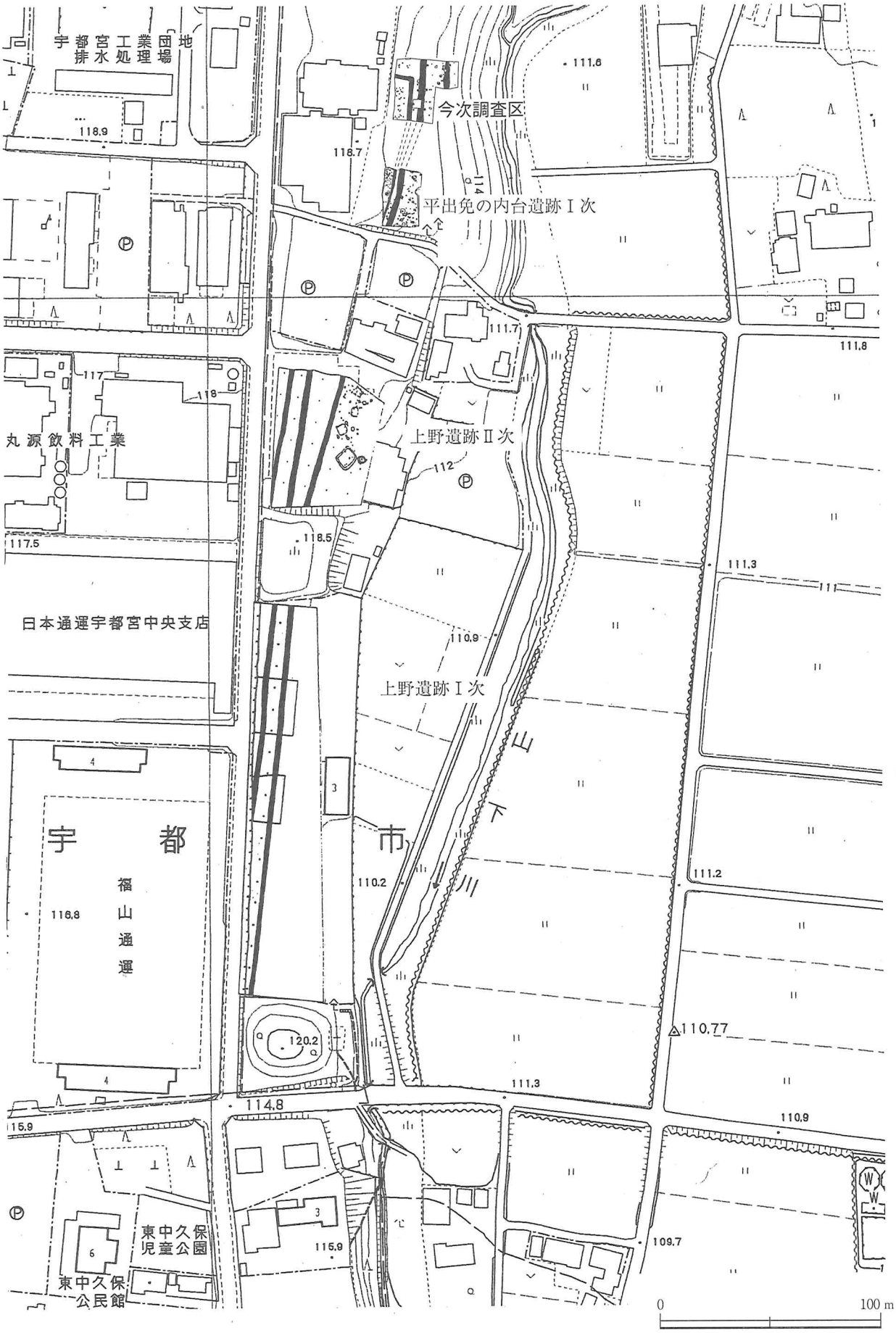
中世　この時代は宇都宮氏の勢力下にあり東方の鬼怒川沿いには、麓下の平出城跡、石井城跡などが所在するものの、本遺跡内において土地利用の形跡は確認されなかった。

近世　この時代は河内郡平出村として、宇都宮藩領であった。今次調査区では、遺構・遺物とも確認出来なかったが、第Ⅰ次調査区では庶民の信仰の対象として築かれた「免の内台１号塚」が確認された。調査の着手前に移設された石塔類から、当時流行していた日待ち、月待ちの信仰に関わるものと推察された。また、塚上からは多数の土師質土器皿や内耳土器の他、奉賽銭もしくは撒銭と推察される銭貨が出土した。遺物は江戸期を中心とするものの、渡来銭や近代の銭貨も認められ、長い期間にわたる信仰が推測される。

近・現代　今次調査区は、数十年前に針葉樹が植栽された造成林であったが、第Ⅰ次調査区は前述の塚の背景として直径50～70cmの雑木が繁る雑木林であった。なお、この辺はアジア・太平洋戦争後に宇都宮市に編入されたような田園地帯であるが、アメリカ軍の空襲を受けていたことが確認された。第Ⅰ・Ⅱ次調査区で、それぞれ２箇所づつ焼夷弾の投下が確認されている。昭和20（1945）年７月12日深夜～13日未明の所謂宇都宮大空襲の痕跡と推察される。土地利用の痕跡では無いものの、忌しい歴史の一コマとして記録に留める。

第２節　遺構・遺物について

古代　溝跡は３条確認したが、前述の通りSD－１は確認状況及び近隣での調査成果から、推定東山道の側溝の可能性が高い。しかし、他の２条は規模・形状及び本遺跡にのみ認められることから、道路側溝とは異なる施設と考えられる。



第16図　平出免の内台遺跡と上野遺跡
（拠：『上野遺跡』第1図）

SD－１は南方の上野遺跡第Ⅰ次調査区から今次調査区まで約435ｍにわたって続き、それぞれ南と北へさらに延びる。また、上野遺跡第Ⅰ次調査区で２条、同Ⅱ次調査区で３条の類似の溝跡が確認されており、第Ⅰ次調査区では西隣のSD－２と併走するように延びるが、北側の第Ⅱ次調査区に到るとSD－１はひとり東寄りに延びて、SD－２との間隔が徐々に広がることが確認されている。本遺跡では、第Ⅰ・Ⅱ次調査区ともSD－１のみの確認であり、SD－２との位置関係は判然としない。しかし、逆に上野遺跡では認められなかった細いＶ字溝が第Ⅰ次調査区で１条、第Ⅱ次調査区で２条確認された。両地区に跨がって確認された西側の溝跡（第Ⅰ次のSD－２、第Ⅱ次のSD－３）は、北端でほぼ直角に折れて西進することが判明した。第Ⅰ次調査区ではSD－１の西側に約２ｍ（芯心では約３ｍ）隔てて併走するように所在し、類似の埋没変遷を示すことから、道路関連の施設の可能性も推測された。しかし、前述の通り第Ⅱ次調査区では併走せずに西に折れることから、何らかの区画施設の可能性が生じた。SD－１が東側の道路側溝とした場合、その西に溝による区画が存在するとすれば、道路幅員の減少や移設に伴ってその機能を停止したことになる。また、今次調査区で新たに確認された東方約10ｍを南北に延びる溝跡（SD－２）は、北は調査区外に延びるが南は確認調査の結果から今次調査区の南端（東は南がやや狭い）より10ｍ以内の所から始まると判断された。地境付近の工事に伴う掘削からも、南に延びていないことが確認されている。この溝跡も規模・形状がSD－１の西側の溝（SD－３）と類似することから、同様の性格の施設と推察されるが、両者の先後関係は明確にし難い。但し、このSD－２がSD－１の東側の台地縁辺部に設けられることからすれば、SD－１に関連する施設の可能性が高い。これに対し、SD－３はSD－１の機能停止後に設けられた可能性が高いことから、こちらが後出の感が強い。

なお、前述の上野遺跡第Ⅱ次調査区においてはSD－１の東側にのみ該期の遺構が認められたが、本遺跡ではSD－１の両側にわたって該期の遺構が所在した。殊に、今次調査区では、９世紀後半代と考えられる竪穴建物跡がSD－１の埋没後に構築されており、SD－１の下限を捉えることが出来たことは、今次調査の成果の一つと言えよう。また、この竪穴建物跡の床面直上より、「泉」の墨書が銘記されたほぼ完形の須恵器坏が正位で出土しており、意図的な安置を推察させる。中山晋氏のご教示によれば「泉」の墨書土器は、道路跡周辺より出土の例が多いとのことであるが、本跡もその一例となろうか。この他、埋積土中より「千□」の墨書銘の記された土師器坏が出土し、本跡及び至近の小穴内より釋読出来ないものの、墨痕の認められる須恵器細片が認められた。文字資料は多いが施設名を示唆するものは無い。

今次調査区の北東部において、一辺70cm以上の楕円形もしくは長方形の比較的大型の柱掘形状のものを４基確認した。残念ながら２辺３本の推定に止るものの、いずれも柱が内傾するように建てられたと推察され、柱間が3.8～4.2ｍと非常に広い。類似の施設は第Ⅰ次調査、上野遺跡第Ⅱ次調査でも確認されており、通常の掘立柱建物では無く、櫓的性格の施設の可能性が高く、いずれもSD－１の東側に所在した。これに関連して想起されるのが、本遺跡と鬼怒川を隔てた東方約2.9kmに所在する国指定史跡飛山城跡の存在である。ここは、宇都宮氏の重臣芳賀氏の拠点で、遺存状態の良好なことから史跡として整備されて利・活用が図られている。さらに、ここで注目されたのは「飛山」という地名と「烽家（とぶひや）」と記された墨書土器の出土である。古代の烽家の実態は定では無いが、古代官道と烽家の密接な関係を示唆するものとして興味深い（今平：1999）。鬼怒川左岸に占地するこの城跡と本遺跡の間には絹島低地が広がり、遠望は頗る良好である。なお、延々と続く東山道に沿ってこれほど近接して各所に望櫓が設けられていたとは考え難く、至近にこれらを必要とする施設の存在が推察される。

かねてより、上野遺跡の調査者はこの周辺に「衣川駅家」の存在を指摘している（今平：1998）が、さら

に渡川点に近い日枝神社南遺跡付近に比定する向きもある（木本：1996）。

今次調査においても「衣川駅家」の所在を確認することは出来なかった。しかし、SD－1の西に所在する溝SD－3による区画は、現存南北長が65ｍ以上に及び、埋没の変遷などからも一般集落の伴うものとは考え難い。県内の郡家遺跡等に見られる区画溝に比べると、規模的には貧弱な感を受けるが、現時点では公的施設に伴う区画施設と考えたい。

近代　昭和20（1945）年、未だ70余年前のことであり、発掘調査報告書の頁を割くべき事か躊躇したが、古代の遺構・遺物については他の遺跡においても記述があろうが、この事象については本遺跡の特色の一つとして略記する。

本遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査区において各２箇所、計４箇所の焼夷弾の落下を確認した。アジア・太平洋戦争当時、アメリカ軍によって投下されたもので、１点はSD－１の埋積土、他の３点は地山のローム層に突き刺さった状態で出土した。これらは、調査前に行った重機による表土除去作業によって大部分が削平され、下端の20cm程が遺存したに過ぎない。しかし、今次調査区では表面採集という形で、ほぼ完形のものが１点認められたことから、他も本来は土中にほぼ完全な形で埋没していた可能性が高い。

宇都宮市における空襲所謂「宇都宮大空襲」は、昭和20（1945）年７月12日23時19分より13日１時39分頃までの約２時間20分の長時間にわたるものであった。これにより市街地の90％程が焼失し、約８万戸が被災したと言われる。この際投下されたのが、Ｍ47焼夷弾とＥ46集束焼夷弾で、Ｅ46はＭ69小型焼夷弾を38箇束ねたものである。出土資料は、このＭ69型と考えられる。高度約4,000ｍで投下されたＥ46集束焼夷弾は、高度約1,500ｍで分散し、15ｍ間隔で落下するよう調整されていた。Ｍ69は、地上に落下の衝撃で信管が作動して中に詰まっている油脂（ナパーム）に火がついて吹き出す構造で、その際、上部の蓋をはね飛ばすとされる（宇都宮市教育委員会　2001）。採集資料は全長70cm、一辺5.5cmの六角柱状で、蓋が遺存し、外面は未だ銀色に光沢をもっていた。ナパームが吹き出す際に蓋がはね飛ばされなかったが、上部側面にナパームの吹き出した跡と見られる錆びた孔が認められた。なお、第Ⅰ次調査区では、北東・南西方向に約12ｍ隔てて確認され、第Ⅱ次調査区では東西に約４ｍと近接して認められた。また、第Ⅰ次調査区の２点と今次調査区の２点は南北長36～41ｍの距離にある。爆撃機は市域に南方から進入し、東方へ帰ったと推定されることから両者は別々の米軍機（Ｂ29）より投下された可能性が高い。

第Ⅰ次調査当時の事業主であった故石原一男氏の談によれば「水田からその東側の集落にかけて数十発の焼夷弾が落下した」、同家の北に隣接する（調査区の東約150ｍ）「新宅の屋根にも着弾したがそれは家人が消火した」とのことである。

この辺は、アジア・太平洋戦争後に宇都宮市に編入されたような、のどかな田園地帯であり、当時第Ⅰ次調査区は塚の背景となる雑木林、第Ⅱ次調査区は畑地であったと思われる。このような所まで空襲の対象とされたことは驚くが、これが意図的なものか、単に帰路の燃料の消耗を避ける為、残りの積荷（焼夷弾）を投下していっただけなのかは判然としない。ただ、調査地点の南方約800ｍには軍需工場の一つである日本製鋼所宇都宮作業場が所在したこともその一因であろうか。

本書の上梓にあたり、調査に対してご理解を賜りました事業主石原秀子氏はじめ、調査及び整理・報告書作成に対してご助力とご指導を賜った諸機関ならびに各位に感謝致し擱筆する。

A．調査区全景（北より）

B．調査区全景（南東より）

C．SI－1完掘（南より）

D．SI－1完掘（東より）

E．SI－1東西土層（南より）

F．SI－1掘方西半部（南より）

G．SI－1カマド遺物出土状態（南より）

H．SI－1カマド完掘（南より）

図版２

A．SI－１カマド掘方（南より）

B．SI－１カマド東西土層（南より）

C．SI－１遺物出土状態（北より）

D．SI－１遺物出土状態（南西より）

E．SD－１完掘（南より）

F．SD－１完掘（北より）

G．SD－１・１Tr土層（南より）

H．SD－１・３Tr土層（南より）

A．SD－２完掘（南より）

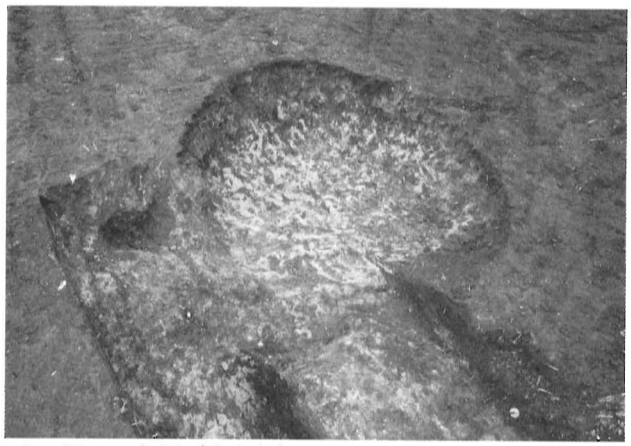
B．SD－２・１Tr土層（南より）

C．SD－３完掘（北より）

D．SD－３南北部完掘（北より）

E．SD－３北東角（南西より）

F．SD－３・１Tr土層（東より）



G．SK－１完掘（東より）

H．SK－３完掘（北より）

図版４

A．SK－４完掘（西より）

B．SK－５土層・完掘（東より）

C．SK－6A・B完掘（西より）

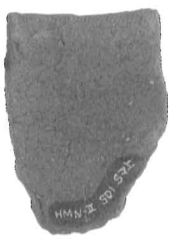
D．SK－７完掘（南より）

E．SK－８土層・完掘（東より）

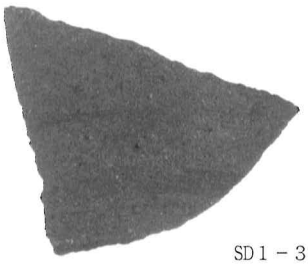
F．SX－１土層・完掘（南より）

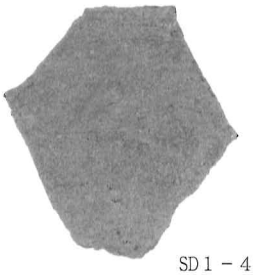
G．P－２・３完掘（西より）

H．基本土層（北より）


SD１－２(R)

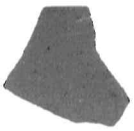
SD１－２


SD１－３


SD１－４

SD２－１

P３(SB－２)


P４

SI１－１

SI１－２

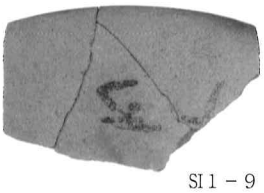
SI１－３

SI１－４

SI１－５

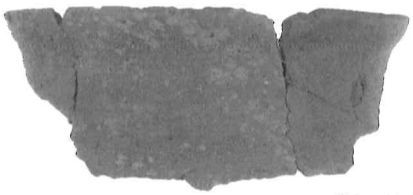
SI１－６

SI１－８


SI１－９

1/3

SI１－11


SI１－10A

SI１－10B

SI１－12

出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひらいでめん　うちだいいせき　だいにじちょうさ
書名	平出免の内台遺跡（第Ⅱ次調査）
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第101集
編著者名	竹下　亘・水野順敏
編集機関	株式会社 日本窯業史研究所
所在地	〒324-0611　栃木県那須郡那珂川町小砂3112　　ＴＥＬ 0287-93-0711
発行機関	宇都宮市教育委員会
所在地	〒320-8540　栃木県宇都宮市旭１－１－５　　ＴＥＬ 028-632-2764
発行年月日	西暦2018（平成30）年６月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひらいでめん　うちだいいせき 平出免の内台遺跡 だいにじちょうさ （第Ⅱ次調査）	うつのみやし　ひらいでまちあざうわの 宇都宮市平出町字上野	9201	3294	36° 33′ 51″	139° 56′ 8″	20171104 ～ 20171126	720㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平出免の内台遺跡 （第Ⅱ次調査）	道路跡	・奈良・平安時代 ・近・現代	・溝跡　３条 ・竪穴建物跡　１軒 ・掘立柱建物跡　２棟 ・土坑　８基 ・性格不明遺構　１基	・土師器、須恵器 ・焼夷弾	・確認された３条の溝跡のうち SD－1は、推定東山道の側溝と考えられる。この溝に重複する平安時代の竪穴建物跡を確認した。

要約	・南の上野遺跡より約435mにわたって延びるSD－１は、推定東山道の東側の側溝と見られるもので、これに重複して構築された平安時代のSI－１を確認した。この重複関係から、SD－１の下限を確認できた。

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第101集

平出免の内台遺跡（第Ⅱ次調査）

発行年月日　2018（平成30）年６月30日
編　　集　株式会社 日本窯業史研究所
〒324-0611　栃木県那須郡那珂川町小砂3112
TEL 0287-93-0711

発　　行　宇都宮市教育委員会文化課
〒320-8540　栃木県宇都宮市旭１-１-５
TEL 028-632-2764

印　　刷　株式会社 松井ピ・テ・オ・印刷
〒321-0904　栃木県宇都宮市陽東5-9-21
TEL 028-662-2511